

2011 年度

# 京都嵯峨芸術大学 FD 年報

Annual Report of Faculty Development Committee  
in Kyoto-Saga University of Arts



平成 24 年 3 月  
嵯峨芸術大学 FD 委員会編



## FD 活動と大学の組織力

これまでの FD(Faculty Developement) は主に、教員個々の教授技能の向上を目的としたものであった。教員用の研修教材の開発、教員相互の授業参観等、教授技能に長けた教員が新任教員や技能未熟な教員を指導する“狭義の FD 活動”は、多分に管理主義的な側面を持ち、大学制度の根幹たる自由自律の原則に対して異質要素を含んでいるように思われる。また、個人技能の重視がともすれば FD の目的を学力低下等への個別対応法等、教育現場の“スキル”的レベルに矮小化して、大局觀を欠いた弥縫策に構成員を奔らせ、根幹である教育理念・使命・目的の達成へ構成員の意識が向かない結果を招いていたようにも思える。確かにミクロレベルでの教育スキルを等閑視すべきことは明らかだが、これでは長い目で見て、組織力の観点から大学の教育力向上と質保証に資することにならないのではないか。また、“教える”行為に注目が向けられる一方で、ともすれば学生の主体的に“学ぶ”行為が忘れられはしないか。教員個々の自由な教育・研究を尊び、ボトムアップによる組織の意思決定を原則に置き、時間割の事情で実技系教員同士の相互参観が極めて困難な状況にある本学が、これまで FD 活動を講演会形式の啓蒙活動にとどめていた理由の一端もそれにある。

しかし、本学は今年度より大きく方針を転換した。学内の組織面では、FD 活動が自己点検評価活動と並んで大学評価会議の下に明確に位置づけられ、より強力な全学的体制で事業が推進されることとなった（企画室はこの体制において、大学評価会議の運営準備を担当するとともに、学長室との連携を取りながら FD 活動と自己点検評価活動を企画・策定する業務を担っている）。また、FD 活動の方針については、管理主義的な方向とは一線を画し、組織内での意識共有を進めるための強力な手段として構想するという転換を図った。つまり、大学組織を挙げて問題意識を“共有”する上で FD 活動に大きな効果を認め、その“共有”を通して、大学教育の質的向上に向けた教員全体の組織的な取り組みを引きだすことを主たる活動目的に位置づけたということである。一般にボトムアップ方式での教授会自治だけでは大学の全体的な意思決定が不可能であり、大学組織の運営上、何らかの形でトップダウン型の管理手法が必要であると言われているが、本学は学内にボトムアップによる意思形成が組織文化として根付いていることを尊重し、あえてそれをより機能的な形で運用する道を選んだということである。

本年報で報告される今年度の FD 活動の事業計画は上記の目的を達成するために編成されたものと考えていただきたい差支えない。特に、ともに意識共有すべき重要な大学構成員として学生を位置付けた“FD カフェ”は、学生を教員管理の先兵として利用する学生参加型 FD が他大学に多い中で、本学の特色を表す先進的取り組みと考えている。総じて試行錯誤の一年間であり、幾つかの反省点も委員会内で挙げられている。また、学生の思考過程をいかに評価するか、問題発見能力をいかに課程教育内で保証できるか等、教育の質保証に向け FD 活動において取り組まなければならない課題もある。教職員および学生からは概ね好意的な評価をいただいたものと考えている。FD 委員会は今後も基本方針を堅持しつつ、大学教育の使命・目的を教職員と学生が分かち合い、協働してよりよい学びの場を創り上げていくために尽力する必要があるだろう。

企画室長  
佐藤文郎

## 京都嵯峨芸術大学 2011 年度 FD 活動をふりかえって

本学の FD 活動は 2011 年度から 3 つの新しい試みを実施した。第一に、「自己点検評価活動と共に FD 活動を全学的に推進する体制を強化する」ため、大学評議会議の下で企画立案し、業務遂行の体制を明確化した。第二に、「教育方針を教員間で共有する」ために、個々の教員の技能を向上させるだけにとどまらず、課程教育を統一的に見て、その教育理念を検討する方針を立てた。第三に、「主体的な学びについて教員と学生が共に考える」ため、教員間だけにとどまっていた FD 活動に学友会執行部をはじめとする学生を参画させた。学生が自らの学習を自己点検できる授業アンケートを作成すると共に、教職員と学生が教育について語り合う座談会「FD Café」を開催し、学生の主体的な学びを醸成させつつ、教職員と学生の双方における意識変革を促した。

総じて、2011 年度の本学の FD 活動は、「大学組織を挙げて教育上の問題意識を共有すること」を目的とした活動であった。特に、FD 活動への学生参画については、学生を用いて教員の指導法を矯正することを目的とせず、教員と学生とが座談会や授業アンケート等を通して、大学人としての使命と目的を自覚し、大学自治の担い手として手を取り合うことを目標とした点で、国内他大学でも前例を見ない試みであったと自負している。教職員と学生が教育について語り合う座談会「FD Café」では、リラックスした雰囲気の中、教職員と学生が具体的な教育のテーマについて語り合った。平生、交流することのない者同士の討論や、話したことのない話題を討論することで、教員と学生が授業の中で共有するべきことについて考えることができた。また、学生が自らの学びを自己点検できる授業アンケートの作成に際して、2 日間の研修会を実施した。この研修会では、実習、講義の教員同士が議論しながらアンケートを作成した。複数分野の教員が集まって議論し、ひとつのアンケートを作成することは、全学的に共有できる自己点検項目とは何かを考える試みとなった。

これらの活動の成果については、まだ客観的に検証する段階ではない。来年度以降も同じ方針で活動を継続することにより、数年後の経年変化で活動の試みが評価されると考えている。

FD 委員長  
神谷三郎



## 目次

FD 活動と大学の組織力	3
京都嵯峨芸術大学 2011 年度 FD 活動を振り返って	4
目次	6
第 1 章 FD 委員会 2011 年度年次計画の立案経緯	9
1-1. 2011 年度 FD 活動日程表	10
1-2. 年次計画の立案と大学評価会議における承認まで	13
①企画室の構想	13
②大学評価会議との関係	14
③学生とともに推進する FD 構想へ	14
④学友会執行部との共闘	16
⑤FD カフェ開催計画の練り上げへ	19
⑥FD 研修案の策定	22
⑦FD 委員会年次計画の策定と承認	26
第 2 章 FD カフェの実施状況	30
2-1. 第 1 回 FD カフェ	31
2-2. 第 2 回 FD カフェ	42
2-3. 第 3 回 FD カフェ	51
2-4. 第 4 回 FD カフェ	54
2-5. 第 5 回 FD カフェ	66
2-6. FD カフェ・アンケートの分析	79
①FD カフェの参加者数と参加した学生層について	79
②FD カフェの進行について	79
第 3 章 FD 研修と学生授業アンケート	81
3-1. FD 研修の具体的計画	82
3-2. FD 研修の開催	87
①趣旨説明	88
②第 1 日目の議論内容	89
③第 2 日目の議論内容	92
④二日間の研修を終えて	93
3-3. 学生授業アンケートの配布	94
3-4. 学生授業アンケートの集計	102
3-5. 反省点	105
①アンケート実施の時期について	105
②アンケートの分量について	105
③アンケートの周知について	105
④アンケート結果の公表について	105

第4章 教育の質保証に向けたFD講演会	108
4-1. FD講演会の構想	109
4-2. FD講演会の開催	110
4-3. 今後への展開	132
終章	134
初任者研修と相互授業参観について	135
①初任者研修について	135
②初任者インタビューについて	135
③相互参観について	135
一年間の活動を振り返って（編集後記に代えて）	136
資料	139
FD委員会規程	140
平成23年度FD委員会議事録	141
FD研修のアンケート用紙・アンケート集計データ	187
①FD研修アンケート用紙	187
②第1回FD研修アンケート結果	189
③第2回FD研修アンケート結果	192
FDカフェのアンケート用紙・アンケート集計データ	195
①FDカフェのアンケート用紙	195
②第1回FDカフェ・アンケート結果	196
③第2回FDカフェ・アンケート結果	198
④第3回FDカフェ・アンケート結果	201
⑤第4回FDカフェ・アンケート結果	203
⑥第5回FDカフェ・アンケート結果	205
学生授業アンケート集計データ	207
①2011前期講義系授業評価（全体）	207
②2011後期講義系授業評価（全体）	209
③2011実技系授業評価（全体）	211
④FD講演会配布資料	212



# 第1章

## FD委員会の2011年度年次計画の立案経緯

1-1. 2011年度活動日程表

1-2. 年次計画の立案と大学評価会議における承認まで

## 1－1. 2011年度活動日程表

FD活動の一年間の歩みを振り返り、以下にその概要を示す。

日時	場所	事項	概要
4/13(W) 18h00-19h00	第3会議室	第1回 FD委員会	自己点検評価委員会との合同会議。学長から機関別認証評価に向けての基本的方針が伝えられた。企画室長からはこれまでの“狭義のFD”から、教員団の職能開発全般を指す“広義のFD”に転換する旨の提案がなされ了承された。
4/14(Th) 11h50-12h50	食堂	第2回 FD委員会	学生とともに教育について語り合う座談会の開催について、入試委員会と連携してイベントと同日開催が可能か検討することとなった。
4/19(Tu) 11h50-12h50	食堂	第3回 FD委員会	委員長を互選で選出。企画室が提案したFD活動年次計画案を各委員が持ち帰り検討することとなった。
4/26(Tu) 16h30-18h30	第3会議室	第4回 FD委員会	自己点検評価委員会との合同会議。これまで自己点検評価委員会が業務としていた授業アンケートの実施および集計がFD委員会の業務に割り振られることになった。
4/28(Th) 12h10-12h50	デザイン学科 共同研究室	第5回 FD委員会	ティーチングからラーニングへの転換を趣旨に、学生授業アンケートの練り直しを内容とするFD研修会を構想することとなった。
5/10(Tu) 16h30-18h00	第1会議室	第6回 FD委員会	自己点検評価委員会との合同会議。FD研修会および学生も交えたFD座談会の開催について、自己点検評価委員会の理解を得た。
5/12(Th) 12h10-12h50	デザイン学科 共同研究室	第7回 FD委員会	FD研修は7月10日、24日の二日間とすること、FD座談会は学友会執行部との共催とし、日程等の調整を行うこととなった。
5/19(Th) 17h30-20h00	グラッヂェ	第8回 FD委員会	FD座談会の予行演習を行い、座談会において学生から出てくる意見を予想・検討した。
5/24(Tu) 17h00-19h00	学生ホール	第9回 FD委員会	学友会執行部との合同会議。FD座談会を入試日程に当てる案は、学生が集まりにくいという理由で見送ることとなった。年間5回の開催とし、次回までに各自が各回のテーマを考えることとなった。
6/1(W) 17h00-19h50	第4ゼミ室	第10回 FD委員会	学友会執行部との合同会議。座談会(FDカフェという名称にすることとした)の年間テーマおよび各回のテーマをディスカッションしたが、成案を得るに至らず、継続検討となった。
6/6(M) 17h00-19h50	第4ゼミ室	第11回 FD委員会	学友会執行部との合同会議。前回に引き続き、FDカフェの年間テーマおよび各回のテーマをディスカッ

			ションしたが、成案を得るに至らず、継続検討となつた。
6/8(W) 16h00-18h00	第1会議室	第1回大学評価会議	2011年度FD委員会年次計画の承認。FD研修案、FDカフェ案の承認。
6/15(W) 12h10-12h50	デザイン学科 共同研究室	第12回FD委員会	FD委員会規程の改訂の必要があることで委員間で合意した。学友会執行部はFD委員会に対して従属性の立場になく、互いの独立性、自律性を尊重しつつ共催という形でFDカフェを運営することが確認された。
6/16(Th) 17h30-21h00	第4ゼミ室	第13回FD委員会	学友会執行部との合同会議。FDカフェの年間テーマおよび各回のテーマをディスカッションしたが成案が得られず、持ち越しとなつた。
6/21(Tu) 16h30-18h30	第3会議室	第14回FD委員会	自己点検評価委員会との合同会議。前期の学生授業アンケートは講義系科目についてのみ実施することとなつた。
6/23(Th) 16h30-19h30	第4会議室	第15回FD委員会	学友会執行部との合同会議。FDカフェの年間テーマおよび各回のテーマをほぼ決定した。また、カフェ開催の具体的準備作業に関する分担が話し合われた。
6/30(Th) 16h30-20h00	第4会議室	第16回FD委員会	学友会執行部との合同会議。座談会のシミュレーションを合同で行った。また、当日の準備詳細について確認が行われた。
7/6(W) 17h30-19h30	講堂	第1回FDカフェ	講堂において、学生を交えた座談会を開催、前半はグループディスカッション、後半は全員で議論を行つた。
7/7(Th) 12h00-12h40	デザイン学科 共同研究室	第17回FD委員会	FDカフェの模様を記したブログを作成し、大学HPにリンクすることとし、担当委員を決定した。
7/10(Su) 9h30-18h00	第6演習室	第1回FD研修	教員30名弱と数名の学生が集まり、実技系授業アンケートの新構想を図つた。様々なプランが出された中、意見の集約は次回の研修会で行うこととなつた。
7/12(Tu) 17h30-19h30	佐藤研究室	第18回FD委員会	第1回FD研修の反省点を挙げ、対応策を検討した。
7/20(W) 17h00-20h00	グラッヂェ	第19回FD委員会	実技系授業アンケートを記名式にすること、可能であれば後期の中間と期末にアンケートを実施することなどの案が出た。
7/22(F) 12h00-12h50	デザイン学科 共同研究室	第20回FD委員会	7月24日に向けて実技系授業アンケートのたたき台となる案を策定した。
7/24(Su) 10h00-15h00	第6演習室	第2回FD研修	教員20名強と数名の学生が集まり、実技系授業アンケートについて成案を得るべくディスカッションを行つた。方向性が見えたところで研修終了。最終案をFD委員会が提出し、後期最初の教授会で審議することで散会した。

7/24 (Su) 16h30-18h30	グラッヂュ	第 21 回 FD 委員会	各委員が FD 委員会の最終案の下案を作成しメールで相互に配信することが申し合わされた。また、後期には FD 委員会主催で講演会やシンポジウムを開催できないか検討することとした。
7/27 (W) 17h30-18h30	第 1 会議室	第 2 回大学評価会議	第 1 回 FD カフェおよび FD 研修会の実施報告を行った。
9/2 (F) 16h00-18h00	短大デザイン 共同研究室	第 22 回 FD 委員会	委員長作成の原案に沿って FD 委員会の実技系授業アンケート最終案をまとめることとなった。
9/22 (Th) 17h00-19h00	第 4 ゼミ室	第 23 回 FD 委員会	学友会執行部との合同会議。第二回 FD カフェに向けての最終打ち合わせを行った。
9/28 (W) 17h30-19h30	講堂	第 2 回 FD カフェ	合評をテーマに講堂で FD カフェを開催した。約 40 名の学生が参集した。
10/6 (Th) 16h30-18h30	第 3 会議室	第 24 回 FD 委員会	自己点検評価委員会との合同会議。アンケートの集計方法、分析方法、結果のフィードバックの方法について議論を行った。
10/6 (Th) 19h30-21h30	グラッヂュ	第 25 回 FD 委員会	今年度はシンポジウムを断念、講演会を 1 回開催することとした。講演内容、講演者の選定を急ぐこととした。
10/20 (Th) 17h30-19h30	第 6 演習室	第 3 回 FD カフェ	“講義おもしろい?” というテーマで第 3 回 FD カフェを開催した。
11/22 (Tu) 18h30-21h30	グラッヂュ	第 26 回 FD 委員会	本学の現状において新任教員の初年次研修の必要性がないことが確認された。そこで、それに代わって新任教員を対象としてインタビュー取材を行うこととなった。
11/25 (F) 17h30-19h30	第 6 演習室	第 4 回 FD カフェ	“実習と演習について” というテーマで第 4 回 FD カフェを開催した。
12/16 (F) 17h30-20h00	第 6 演習室	第 5 回 FD カフェ	“大学生ってなんだ?” というテーマで第 5 回 FD カフェを開催した。
1/20 (F) 19h00-22h00	グラッヂュ	第 27 回 FD 委員会	アンケートの集計方法についての最終確認、および、年間活動報告書の作業割振りを行った。
2/23 (Th) 9h00-12h00	短大デザイン 共同研究室	第 28 回 FD 委員会	2012 年度年次計画を検討した。また、FD 活動に関する中期目標案（企画室提案）を検討し、若干の修正のうえ承認した。
3/2 (F) 17h30-1930	第 1 会議室	FD 講演会	立命館大学 沖裕貴教授をお招きして、「3 つのポリシーに基づく教育の質保証の取組～ DP・CP・AP の策定、シラバスの作成～」という議題でご講演いただいた。
3/13 (Tu) 13h00-17h00	短大デザイン 共同研究室	第 29 回 FD 委員会	次回 FD カフェを 4 月 17 日、講堂にて開催すること、テーマは “大学ってなあに?” とすることとなった。その後、今年度の授業アンケートの反省点を踏まえ、

			来年度方針を議論した。
3/16 (F) 15h00-22h00	第1会議室	第4回大学評価会議	2012年度FD委員会年次計画が承認された。また、口頭にて2011年度の活動報告がなされた。

## 1-2. 年次計画の立案と大学評価会議における承認まで

### ①企画室の構想

これまで本学においてFD活動は定期的に開催され、教員の参加率もまづまづであった。活動内容は教授会終了後の講演活動が主であり、内容においては心身の問題をかかえた学生に対する対応法、学生の主体的な学びを引き出す方法、各教員の授業実践上について等、多岐に渡っていた。しかし、その間に本学の休退学者率は下げ止まらず、また、学生の就学意欲の低下が顕著になるなど、問題の広がりに対してより実効的な対策を講じる必要が学内で意識されるようになってきていた。

また、FD活動が改正大学設置基準において義務化されたこと、国内外でのFDに対する考え方が大きく変化を見せ、現場の抱える問題に対応するための教授方法の検討にとどまらず、課程教育全体を統一的に見てその教育理念を検討し、研修等の活動を通して教育方針を教員間で共有することへと重点が移されつつあることを踏まえ、企画室の新体制とともにFD活動の方針を、それまでの業績を尊重しつつも、組織を挙げて問題意識を共有するまでのFD活動の有効性に着眼して大幅に変更することとなった。

以下が、年度当初にFD委員会に提示された企画室の素案の骨子である。これまでのFD実績を受け継ぎつつ、教育方法の検討も継続した上で、FDの適用範囲を広げる方向で企画されたものであり、今年度のFD活動の出発点として特に記しておきたい。

- ・教育方法の改善にテーマを絞った“狭義のFD”から、課程教育の検討・改善、教育目標・理念の共有を目指す“広義のFD”へ。
- ・自己点検・評価委員会や教務委員会との緊密な連携と協働。
- ・新デザイン学科の発足、プロジェクト系演習科目である「京都プロジェクト」の2012年度開講を見据えて、演習授業の教育目的の共有、授業運営方法の開発をテーマとして選び、FD活動のひとつの柱とする。
- ・大覚寺学園教育憲章や学部・学科の教育目標（設置申請文書）に照らして、各教員が自らそれぞれの教育活動の達成目標と自己点検項目を策定する作業をFD活動のもう一方の柱に据える。
- ・講演形式ばかりでなく、グループ討議、ワークショップ、シンポジウム等の手段を用いて全教員が主体的に参画できる活動を展開する。ただし、ピア・レビューの導入に関しては教員の業務繁多を招かない範囲で慎重に検討する。
- ・非常勤教員の活動参加を検討する。
- ・SD活動との連携を通して、大学全体の意識向上と組織力増進を目指す。
- ・FDは大学広報活動の一環であるとの認識を共有する。オープンキャンパス、学園祭、大学説明会、制作展等の機会に合わせて、公開のFDシンポジウムを開催し（学生も入場可）、大学の教育への姿勢を学外にアピールする機会とする。
- ・FD活動実績を大学HPを通じて公開する。

## ②大学評価会議との関係

本学は平成 18 年に機関別認証評価を受審した（芸術学部・大学院は日本高等教育評価機構、短期大学部は短期大学基準協会）。第三者認証評価を 7 年ごとに受審するならば、第 2 期の受審は平成 25 年度となる。そこで、本学規程上に定められた大学評価会議が中心となって、受審に向けての準備作業を行うことになった。また、大学評価会議の議長は三好学長が務め、本学教学組織および事務組織の役職者が構成員を務め、議事運営の実務作業は午居事務局長（および総務課）と佐藤企画室長（および自己点検・評価委員会）が連携して当たることになった。

さらに、平成 23 年度からの明確な変更点としては、自己点検・評価委員会に加えて FD 委員会（ともに事務局は総務課が担当）が大学評価会議の承認の下に活動することになったこと、年度ごとに活動報告書を大学評価会議に提出し、承認を得ることになったことが挙げられる。以上の方針とともに、本学の事務組織規程上（11 条）、企画室が自己点検・評価委員会に関する事務局長とともに大学評価会議の運営を実務面で支えることになった。つまり、大学評価会議という全学的な体制の下に、これまでの自己点検評価活動に加えて FD 活動を明確に位置づけたことになる。

こうした経緯もあり、平成 23 年度の FD 委員会の活動は、大学評価会議の年度第一回目の開催に向けて、活動計画と作業スケジュールを策定する作業から始まることとなった。

なお、企画室は年初の素案において、機関別認証評価への準備作業においても、大学主体の自律的な自己点検評価活動の実現を第一に考えることを提案している。以下に該当箇所から引用する。：

「認証評価の評価基準をクリアすることだけを目標として作業することは、単なる労苦以上の意味を持たない。[...] 従って、ただひたすら認証機関の評価基準に振り回されるのは無意味に近く（自己点検とは本来、他から強制されるべきものではなく、「自己」という語からも明らかのように、大学が組織として自律的に行うところに出発点があるべき）、むしろ、当初から本学が自主的に FD や自己点検の方針を策定・展開することに重点を置いて作業を進め、認証評価をそれらの活動展開の“呼び水”として利用する方が、大学経営に資するところ大と考えられる。脇目も振らず認証評価への最短ルートを行くのではなく、大学の組織力を点検・整備しながら回り道をして目的地へ向かうことが肝要である。つまり、認証評価までたどりつく過程を、大学力向上に利用するのである。

大学が一貫した教育方針、人材育成方針を示し、教育の質的向上に真摯に取り組んでいることを対外的にアピールすることは、大学への社会的信頼を獲得する上で必要不可欠の要素になりつつある。そのためには大学の組織的な体制構築が急務であり、FD、SD と自己点検・評価をそのために利用するという発想が求められる。[...] 本学なりの知恵と工夫を用いて、必要な部分に力を結集できるしなやかな組織体制を目指したい。」（「平成 23 年度企画室素案」）

このように、大学評価会議の下、大学運営の自律性向上のため、組織における問題意識の共有を図るという大方針が確認され、その先導役を FD 活動が担うこととなった。FD 委員会はこの重大な任務を平成 23 年度当初から背負い、スタートを切ることとなったのである。

なお、本学のような小規模単科大学では、FD 専従の教職員を配置することができない。FD 委員はそれぞれに授業業務を抱え、委員会業務も掛け持ちしながら FD 活動を推進し続けたのである。

## ③学生とともに推進する FD 構想へ

平成 23 年度からの FD 活動の新機軸の一つとして、学生参加型の FD 構想が挙げられる。大学自治を考える上で、また、教育の質的向上の実現を考える上で、同じ大学人である学生も含めて意識共有がなされ

なければならないと考えたところにこの構想の出発点があり、すでに、企画室の年初の素案の段階で、学生を教育活動の対象、保護・管理対象としてのみとらえるのではなく、連帯して学園を創造していくパートナーとして考え、その目的のために大学人としての素養涵養に力を注ぐという提案がなされている。平成23年度FD委員会はこの発想を取り入れ、学生参加を基軸として活動を展開することになった。

当初の企画室の素案段階では次のような構想であった：

「新デザイン学科の教育目標は、自律的かつ普遍的に思考し、行動する能力である。また、大学広報で「考える芸術大学」を標語とした京都駅ビルでの卒業制作選抜展が計画されており、創立40周年の記念シンポジウムは「大学における芸術教育とは何か」をテーマとしている。しかし、志高い標語が先行する中で、教育の実質が伴っておらず、さらに、教職員がこうした新機軸に十分な理解をもち得ているとは言い切れない。」

FD活動や自己点検活動を対策に充てるにしても、教職員組織の内側だけで事態の解決を図るには限界がある。

そこで、学生による自治組織である学友会に着目したい。学友会が集約した学生からの意見・要望について話し合いを行い、相互理解を深めるという趣旨の下、教育のあり方に関して学友会と大学当局との間で定期懇談会を開催し、自己点検評価活動の一環と位置づけ、教職員意識の変化を促すという発想である。同僚間では緊張感に乏しく、目先の利害調整に追われて意見集約がなされない場合でも、学生からの要望に対しては真摯な対応が求められ、結果として教職員の意識改革の機縁となり得る。学生組織と教職員組織は二人三脚で互いの活性化を図るべきである。

学友会との懇談会は、学生への説明責任という観点からも望ましい。現今の学費は高騰を続け、苦学生にとってアルバイト等、学生個々の努力の限界をはるかに超えた水準に達している。家庭における教育費負担の問題も深刻である。政府による私学助成金の実質的カットは大学経営上深刻だが、問題はそのような逆境の中で個々の大学がいかなる教育上の良心を発揚し得ているかにかかっている。説明責任は教育機関間の競合の観点からも欠かせない視点である。

しかも、自治は大学教育の根幹である。学生による自治が健全な形で機能しているか否かは、その大学が学生による主体的、自律的活動を尊重しているか否か、教養教育の理念に則って運営されているか否か、すなわち、信頼に値する教育機関か否かの指標となり得る。自治は母校愛とも密接に関連する。学生が主体的に考え、大学組織の中で活動する道筋が大きく用意されている必要があり、それが受験生を惹きつける大学の気風を育てる。美術大学間の現今の競合を考えれば、これは有力な広報コンテンツとなるのではないか。また、学生の自主的な判断・行動を促進することによる相乗的教育効果も期待できる。「考える芸術大学」の第一義はもちろん、学生自身が“考える”ことでなければならない。」

これらは、現今の学生における就学意欲の低下に対する根本に遡った改善策を検討する際に避けて通れない問題である。学力低下への対処法として学生をあえて子ども扱いしたり、迎合的に弥縫策を考えるのでは、学生の就学意欲をかえって減退させる危険性が高い。むしろ、自律的に思考し行動する対等な大学人として教職員が学生に接し、主体性を持つよう促すことが基本軸になければならないだろう。そればかりでない。大学教員に対して意識改革が必要な現状にも目を向ける必要がある。

問題は学生と教員の双方にあるわけだが、意識改革をトップダウン方式で進める方法は組織力強化の観点からも大学自治の観点からも必ずしも上策と言えない。自由闊達なディスカッションを通して、学生ばかりでなく、大学教育の本質に必ずしも自覺的でない教職員にも、就学の意味づけ、大学教育のあり方を意識共有していくこと（学生との対話という媒介手段を通じて教職員団の意識向上を図っていくこと）、つ

まりボトムアップの方式が、自由・自治を重んじる本学の基本的な動き方であろう。こうした議論は実際、平成23年度の発足当初FD委員会内で真剣に交わされた。その結果、大学教育の確固とした理念に基づき、教職員と学生との間において基本的「学力」観に関する意識共有がなされること、「大学」であるからには、教育において責任を持つべき教養としての「学力」が単なる「読み書き算盤」、「キャンパスライフに慣れて友達を作ること」でないこと(FDの目標・テーマ設定との連動)、「大学人としての素養、すなわち、普遍的見地から自律的に思考・行動できる能力、自ら受ける教育を鳥瞰的視点から評価できる能力が一貫して求められていることを構成員間で共有すること、大学での学びの意義、自由・自治の理念、大学が目指している教育目標、カリキュラム構成上の基本理念について粘り強く学生への周知が責任をもって行われるべきことなどが、基本方針として委員の間で確認されるにいたった。この一体性が今年度のFD活動の実質的な原動力になったと言えよう。

学生参加型のFD活動については、近年他大学での導入例も散見されるようになってきた。ただし、それらの例を見るに、FD活動の目的を拡大せずに教授方法の改善という狭義のFD活動に学生の参画を促すケースが多いように思われる。その結果として、学生を授業の監視役、トップダウン型の教育管理の先兵として利用することに終始してはいないか疑念を持たざるを得ない。あるいは、学生を使って教授法に定評のある教員へのインタビューを行わせるという発想にも、管理主義的な側面が否めないように感じる。本学は極力管理的運営を避け、ボトムアップの意思決定を通して運営してきた大学であり、大学自治の原則を大きく損じる拙速な管理手法には馴染まない組織文化を持っているとFD委員会では考えている。また、FD活動をより広義に捉え、組織の中の意識共有を醸成するための活動を本義として再出発するに当たって、学生に風紀委員役やインタビュア役を押し付けることは望ましくなく、むしろ、パートナー、あるいはステークホルダーとして教職員と学生間の相互尊重の原則に立って、互いの意識向上を目指すことを原則として掲げることにした。そこで、FD委員会として着目したのが学友会執行部の存在であった。

#### ④学友会執行部との共闘



学友会との協議の模様 その1

FD活動に学生が参画する形を模索する中で、浮上した案は教職員と学生とが大学教育に関した様々なテーマを自由に議論し合う座談会、FDカフェの発想である。国内他大学でもFD活動の一環として、いわゆる“しゃべり場”を設けて、学生の参画を促す試みが増えてきており、本学のFD座談会、FDカフェも

基本構想を同じくしていると思われる。ただし、FD活動の一環であるからには、大学教育の問題にテーマを限定する必要がある。FD委員の中には、大学施設やその運営に関するテーマを学生と語り合いたいとの意見もあったが、学生生活満足度に関わるテーマは教育問題とも無関係ではないものの、教育力の組織的向上という主要問題に直接的に関わり合うものでないだけに、慎重に座談会のテーマを選ぶべきことで委員会内での合意が取られた。また、授業等に関する学生不満のはけ口として構想することは、FD活動に管理主義的機能を付与してしまうとして避けるべきこと、あくまで第三者に対する誹謗中傷を避け、建設的な意見交換を通して教育の現実から大学教育の理想・期待へと意識のシフトチェンジを図るべきこと、そのことを参加学生・教職員に対して周知徹底していく方針を確認した。

また、FD委員会としてはただ漫然と学生の参画を待つのではなく、教職員側にFD委員会があるように学生側にもコアになる組織体があることが望ましいと判断した。そして、その連携相手として委員会が白羽の矢を立てたのが学友会執行部であった。

学友会は伝統ある本学唯一の公式な学生自治組織であり、例規集にも関連諸規約が掲載されていることから明らかなように、大学運営上においてもその存在が認められてきた学生団体である。しかしながら、現今の学生の自治意識は概ね低下しており、学友会総会等で定足数を満たすことが不可能になり、自治組織としての実質的な活動ができない窮状に長く陥っている。その結果、近年は学生のための種々のイベントを主催すること、諸クラブ・同好会組織のとりまとめを行うことに活動の主軸を移しつつある。見方を変えれば、催し物を開催するイベント・サークル兼クラブ取りまとめ組織として存在してはいるものの、学生の学友会活動への理解が乏しく、学生自治組織としてその存続まで危ぶまれる状況であった。そうした中で、平成22年度の学友会執行委員長は辞任を表明し、平成23年度当初の大野学友会執行委員長は学生の全般的な自治意識向上に向けて暗中模索の状況にあったと思われる。

FD委員会は年度当初から彼らへの呼びかけを行い、学友会執行部構成メンバー（当初はそこに前学友会執行委員長にも参加をお願いしていた）との協議を繰り返し行うこととなった。特に、学友会執行委員長以下執行委員たちが一般学生の現状や大学組織の機能性に対して大きな危機意識を持っていたことが、FD委員会の呼びかけに積極的に応じ、その後のFD委員会との長い交渉を乗り切った彼らのモチベーションを支えたものと思われる。学友会執行部との協議は5月24日から正式にスタートして6月末までに6回を数え、時間はその時点で延べ18時間に及んだ。



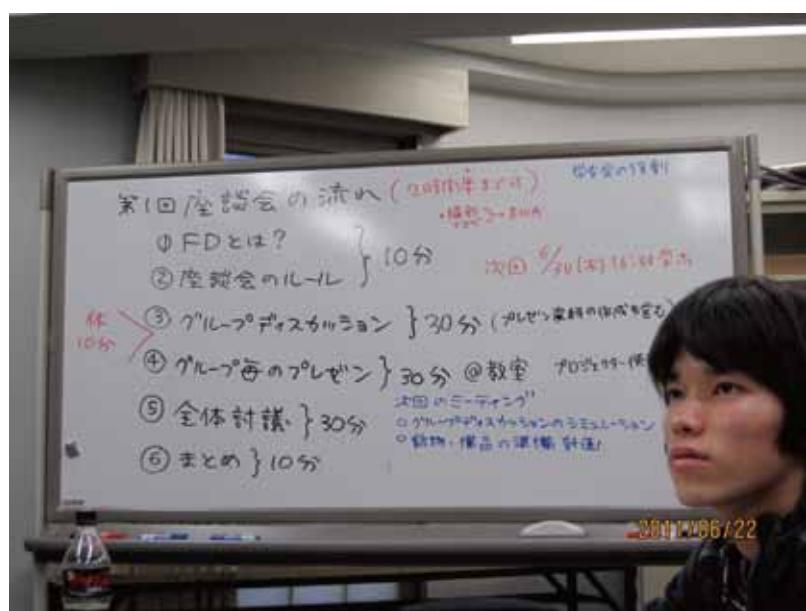
学友会と執行部のホワイトボード

まず、教員と学生との関係について、学生は決して教員に従属する存在ではないこと、従って、学友会執行部はあくまでも FD 委員会からは独立した存在で、相互の自律性を尊重した上で座談会を共催することが確認された。こうした教員と学生との相互性は大学の本来のあり方からすれば当然のことながら、こうした合意が実際に成立したことの意義は極めて大きく、他大学の FD 活動の実例を見るにつけても画期的

なことではないかと FD 委員会では考えている。

ただし、学友会執行部との協議の中で、彼らが特に重大な关心を持って FD 委員会を問い合わせてきたポイントが二点ある。その一つは、FD カフェという試みが大学改革であるのか否か、という問題である。FD 委員会からは、もちろん大学を良くしていこうとする試みであるが性急な改革ではない。組織を挙げて意識を共有していこうとする試みであるだけに、その性質上、直ぐに効果が期待できるものではない。拙速にことを運べば、意識共有が絵に描いた餅になる。ことによると、彼らが卒業したのちに徐々に効果が顕れるかもしれない。しかし、本当の組織力を期待するのであれば、それ以外に方法はない、と応じた。多大な時間を費やす活動であるならば、学生がそれに見合った短期的効果を期待するのが当然であろう。中長期的視点で思考できる FD 委員に対して学生の就学年数は限られており、短期的な活動視野を持たざるを得ないことは余りにも当然である。その点において教員と学生の共闘関係が残念ながら非対称の部分を抱え込まざるを得ないことを、協議を通して双方で認識することとなった。

二つ目の点は、この活動が学生の自律性、自治意識の向上につながるのかという問題である。つまり、学友会執行部としての直接的なメリットに関わる問題であるが、この問題に対して答えるためには、学生の自治意識が低下している原因を精確に把握できているのか、FD 座談会がその原因に対する対処法として果たして有効か否かという問題まで遡る必要があるだろう。この難問について FD 委員会と学友会執行部との見解が正確に一致していたかについては今後の検証が必要であろう。しかし、少なくとも、学生の就学意識の向上には自律的に思考・行動する大学人としての自覚が大きく関わっていること、自らの学びの場をマネージメントしようとする学生意識が高まるならば、自治の気風が自然と学生間に育つであろうこと、そのための方法論としての FD カフェを試行錯誤しながら運営していく必要があること、学友会執行部がこうした活動に主体的に関わることが必要であることにおいて、FD 委員会と学友会執行部との緩やかな合意と共闘関係が成り立っていたものと考えている。



学友会との協議の模様 その 2

## ⑤FD カフェ開催計画の練り上げへ

上記の問題を水面下にはらみつつも、学友会執行部との協議は、FD カフェの目的・年間テーマ・各回のテーマをめぐって進んでいった。

座談会が教職員と学生の間の意識共有を進めるという点で、双方の合意は比較的スムーズに成立した(第十一回 FD 委員会議事録参照)。しかしながら(当然のことでもあるが)、何を共有すべきかという問題については容易に一致点を見いだすことができず、長い協議時間を費やすこととなった。学友会執行委員会は協議の場で、学園の教育目標に見いだされる文言、「やわらかな感性、ゆたかな美意識、かけがえのない自分」こそが共有すべきものであり、それを十分に咀嚼して得られた要素を出発点として大学教育を再構成すべきであると強く主張した。筋の通った正論である。だが、それに対して、FD 委員会側は一定の理解を示しつつも、共有すべきは文言そのものではなく、大学人としての自律性であり、より具体的に言えば、学びの主体性、自らの学びを振り返る視点であるという主張を返した。この溝は、議事録の示すとおり容易には埋まらなかった。



学友会との協議の模様 その 3

このようなやり取りを繰り返しつつ、6月23日の段階で、年間計5回のFD カフェのテーマをそれぞれ、①授業について、②合評について、③授業アンケートについて、④制作展について、⑤理想の大学生像について、と仮決定するに至り、6月30日の段階でFD 委員会と学友会執行部合同で第1回 FD カフェのシミュレーションを行い、課題点をリストアップするまでに至った。以下に学友会執行部との長時間にわたる真摯な協議の成果を示すものとして当日の議事録から引用したい。



学友会との協議の模様 その4

	予想意見	対応
①	講義中のおしゃべり、出欠管理の杜撰さ、遅刻者の管理、成績管理の問題	管理の厳格化と方針の一本化は確かに重要。しかし、もっと重要なのは大学という共同体を構成しているという意識、履修意識の共有であり、無闇に管理することは大学の本来の姿ではない。 大学における勉学は、単位取得のためだけにあるわけがない
②	講義が面白くない、チンパンカンパン、何を意図しているかわからない、講義に参加する意欲がわからない	教員と学生との意識の乖離の結果であるカリキュラム・ポリシーを理解していない結果でもある。問題は、教員の側にも学生の側にもある。
③	なぜデザインの学生にデッサンが必修なのか	
④	大学の勉学について、それを就職やスキルの問題にすり替えてしまう傾向があるのではないか？	
⑤	成果物だけを求めて共有すべき目標を示してくれない授業が多い	
⑥	シラバスでは授業の内容が分からぬ講義科目がある。	
⑦	イラストレーター や フォトショップのような情報技能に関する授業は今までいいのか？	
⑧	面白い実習とは成果が学習者自身に見える授業	自己チェックの重要性を教員と学生で共有
⑨	自由課題で悩む学生が多い、特に卒業直前、卒業後に自分の方向性や表現に気づく学生がいる	重要な問題であるが、アート論に発展すると、短い時間がたりなくなるので、早めに切り上げる
⑩	教員側が座談会を仕切ってしまわないか？	冒頭で、学生の意見をなるべく引き出すように各先生方にお願いしておく

また、当日の機材調達についても以下のような分担を行った。

IC レコーダー	大畑、仲、大野、佐藤、総務課
模造紙	佐藤
マジックペン	山本、佐藤
マグネット	佐藤
ドラムコード	倉山
延長コード	山本
紙コップ	佐藤
ゴミ袋	佐藤

コーヒーサーバー	神谷
ポット	神谷
コーヒー、紅茶	神谷が調達
雑巾	神谷
クーラーボックス	学友会
ソフトドリンク	神谷
ビデオカメラ	固定用（倉山）×3（撮影は広報室に依頼）
マイク	総務課
プロジェクト	山本
スチールカメラ	倉山 × 1

長い準備作業を経て、FD委員会と学友会執行部はようやく第1回FDカフェ開催に漕ぎ着くことになった。彼らはFDカフェ構想を通じてFD委員会の最良のパートナーであった。その真摯な態度にFD委員自身が触発され、深く考えさせられる場面も多々あった。彼らの粘り強い努力と忍耐によってFDカフェが実現したと言ってもいい過ぎではなかろう。FD委員会一同、平成23年度学友会執行部に最大限の敬意と賛辞を表するものである。



学友会との協議の模様 その5

#### ⑥FD研修案の策定

企画室では年度当初から、教職員と学生による共同の研修会の構想を持っていました。この構想は先にも述べた通り、一部は学生と教職員とのFD座談会、FDカフェとして実現していくのであるが、企画室の当初の構想では、学生との座談会ではなく、ワークショップ形式のFD研修会の構想であった。

また、平成22年度までは自己点検評価委員会が学生授業アンケートを実施していた経緯があり、企画室が素案を提示した段階では、アンケートを自己点検評価委員会業務に含めて構想されていた。企画室の素案段階での見解は以下の通りであった：

「学生授業アンケートの実効性には疑問符が付されるが、他大学の実施状況などを見ながら当分の間継続実施が望ましいだろう。ただし、アンケート項目の再検討が最低限必要である。一般的に、明確な教育目標や評価基準の設定を怠った場合、安易に学生満足度に頼ってしまう傾向が見られるが、“最大多数の

最大幸福”で大学教育を評価することは危険であり警戒を要する。アンケート結果に無条件に信頼をおくことはできない。併行して、教員が科目の教育意義やカリキュラムの編成理念について十分学生に伝える努力を払うことが必要である（教務部との連携）。また、その科目の教育目的が課程教育の目標と一致しているか、その科目の教育目的が達成されているか、その科目を通して自らを高めてより広い視野を持つとする意欲が高められたか等、本質的目標設定とその達成度が学生によって評価される体制を整備しなければならない。さもなければ、学生授業アンケートの実質的な意義はほとんどない。ベンサム流功利主義からの脱却が大きな鍵を握る。」

このように企画室は当初、従来型の授業アンケートの実効性に関しては懐疑的な見解を示すと同時に、学生の授業満足度評価に安易に流されることへの警鐘を鳴らしている。

ところが、4月26日の第4回FD委員会（自己点検評価委員会との合同会議）において、学生授業アンケートの企画・実施が改めてFD委員会の業務に振り分けられることとなった。ここに至って、FD委員会内で、学生参加型のFD研修会において学生授業アンケートについてディスカッションを行い、質問形式や質問項目を決めていくというFD研修会の構想が成立することになったのである。

この構想の基本コンセプトは「ティーチングからラーニングへ」である。従来型の授業アンケートの場合、学生からの評価の対象は教え方、“ティーチング”であった。学生は第三者的な目線で教員の“ティーチング”を評価することが基本にある。学生が学費を収めて大学に通っているからには、大学はそれに見合う教育サービスを提供しなければならない。大学教育がサービス業であるならば、学生はそのサービスの受益者、消費者ということになる。国による私立大学への財政補助が低水準のまま、特に利益率の低い芸術大学は高額な学費を個々の学生から徴収している。経済原則から言えば、大学が学生から教育サービスの質を問われること自体を否定することはできない。

しかし、こうしたサービス業としての大学観は、大学教育の本質を歪める大きな危険性をはらんでいる。大学とはそもそも自由・自治の府であり、その構成員たる学生はサービスが与えられることを受動的に待つ消費者であってはならず、反対に、互いに手を結びつつ積極的に学芸を究めようとする存在でなければならない。従って、“ティーチング”を評価する授業アンケートは学生の学ぶ者としての当事者意識を阻害し、ただサービスを待ち続けるだけの他律的な精神を助長し、大学教育の存在根拠を希薄なものにさせる危険性があるのである。

また、技能教育を中心となる芸術大学の場合には特殊事情として、教員と学生との関係と師匠と弟子の関係とが混同される風土が実技教育において根強く残っている。教員と学生の一対一、あるいは、一対多の関係において精神面も含めて技能が伝授されるという図式には、学生の自律性を尊重する本来の大学教育とのあり方と矛盾する要素が含まれている。また、教授法“ティーチング”へ強い関心が向けられる一方、学生の学びの場、“ラーニング”に視点を移す際に障害となるケースが見られるように思われる。

こうした反省を踏まえて提唱されているのが“ラーニング”への転換である。FD委員会は第6回FD委員会（自己点検評価委員会との合同会議）において次に示す議事資料を提出し、“ラーニング”への転換を表明したのである：

（ちなみに、この時点において、FD委員会ではFD研修のことをFDカフェと名付ようとしていたことを予めお断りしておく。）

## FD Café in Saga（仮称）企画案（FD 委員会案）

### I FD に関する新しい構想：狭義の FD から広義の FD への転換

FD 活動は改正大学設置基準において義務化されました。本学でも佐野先生を中心とした FD 委員会の活動の結果、定期的に開催され、参加率もますますの状況です。

ただし、その間に国内外での FD に対する考え方は大きく変化を見せてています。現場の抱える問題に対応するための“教育方法の検討”が主流であった時期から、ここ数年では、課程教育全体を統一的に見てその教育理念を検討し、教育方針を教員間で“共有”することへと重点が移されつつあります。

ただし、教育理念・方針の共有は上からの管理によって実現すべきではありません。上で方針決定して下におろすのではなく、むしろ、教育目標・方針の検討に全構成員が主体的に関わる体制づくりが必要です。FD 活動には組織を挙げて問題意識を“共有”する上で、教員全体の組織力を引きだす上で大きな効果が認められます。従って、本学でもこれまでの FD 実績を受け継ぎつつも、より自由な発想で FD の活用方法を検討し、教育において組織力を発揮する方向性を定めていかねばなりません。

また、これまで “いかにして教えるか” という教師目線が FD の主要関心対象でしたが、これからは “いかにして学ぶか” という学生目線で教育システム全体をとらえるという発想も必要になるでしょう。特に、演習科目的運営において、一方的な技能・知識伝授では授業が機能しないことが容易に予想されます。学生がいかにして主体性をもって自らの学習をふりかえるのか、目的意識を持って学ぶのか、そういった学びの場を教師がどのようにコーディネートしていくのかが私たちの大きな関心領域になるでしょうし、そのポイントに対して大学全体が組織的に動くことが望まれます。

### II “意識共有” を目指した自己点検評価活動へ

上記のような FD 活動が功を奏すためには、自己点検評価活動もまた、新たに構想される必要があるでしょう。

例えば、授業アンケートにしてもそうです。これまでの授業アンケートは “教える行為” を学生が評価するものでした。今後は、“学ぶ行為” を学生自身が自己評価する方向にシフトする必要があるかもしれません。きちんと科目の教育目標を理解して学び、学習成果を挙げることができたかが自分自身で評価するのです。このようなシフトの結果、学生の当事者意識が向上することが期待できますし、みずからの学びに対する自省的態度がより深く身につくものと期待されます。

また、学生による自己評価と並行して、教師もまた同じ評価項目で自分の授業を評価するという「ダブル自己評価」も一つのアイディアです。学生と教員とで評価の乖離が大きい場合は、教員がきちんと学びの状況を把握し直して、より適切に授業をコーディネートする必要を感じることになるからです。こうした新しい授業評価システムが機能するためには、学生が授業の教育目標をきちんと理解していること、教職員と学生の間できちんと意識共有がなされていることが求められるでしょう。また、学生との意識共有を図るために、アンケートの項目が強制的に与えられたものではなく、教職員と学生の意見交換を通して醸成されたものであることが好ましいでしょう。

このような変化に応じて、アンケート結果の取り扱いにも多少の変化が必要になるものと思います。自己点検評価委員会でその取扱い方法について議論を行い、点検をフィードバックする仕組みを議論していただかねばなりません。

また、自己点検評価の意義も多少ながら変化するものと思われます。管理手法の一環としての自己点検評価から、共有手段の一環としての自己点検評価への移行が基本的なコンセプトとなるでしょうし、それ

こそ、大学の自律性、大学自治の本義を報告書によりよく反映させるポイントとなることでしょう。これは、フォーマットの定まっている第三者認証評価よりも、それ以外の年度の報告書でより容易となると考えられます。

以上述べたことは、以下の箇条書きにまとめられます。

- ・教育方法の改善にテーマを絞った“狭義の FD”から、課程教育の検討・改善、教育目標・理念の共有を目指す“広義の FD”へ。
- ・“ティーチング”から“ラーニング”へ
- ・ワークショップ型の意見共有を目的とした FD 研修
- ・職員、非常勤教員の活動参加
- ・学生の参加が必須（学生部との緊密な連携）
- ・大覚寺学園教育憲章や学部・学科の教育目標（設置申請文書）に照らして、学習の達成目標と自己点検項目を策定する作業を FD 活動に組み入れる

### III FD カフェの構想について

#### ①本年度前期の FD 研修会

自己点検の項目設定を目的としたワークショップ形式の FD 研修が必要と考えます。すなわち、1、2 日間を使って教職員や学生有志が一堂に会し、グループに分かれて自己点検項目や演習授業の授業アンケートの項目をディスカッションするというものです。研修中のディスカッション等を通して意識共有を図り、大学教育の方針を語り合うわけです。

カフェと名付けたのは、その研修の場が堅苦しくなく、学園の将来や学びの理想をリラックスしてざっくばらんに語り合うことを望むことです。学友会執行部を中心に学生が参加することが望ましいですし、語り合う中で教職員と学生の意識の共有が進められるでしょう。また、評価項目が与えられたものではなく、学生自らの参画で作成されたものとすることで、アンケートに対する学生の当事者意識を高める効果も期待できます。

ルールとしては、大学教育の現状から出発しないことです。むしろ、そうした態度から距離を置き、教育目標を達成するためにどのような学びが必要になるかを考えること、つまり理念から出発することが鍵となります。その理念と方法論を学生と共有することができれば、本学の教育力は新たな推進力を得ることになるでしょう。

ワークショップには少なくとも 2 日間が必要と思われます。初日午前中は基本構想の説明とディスカッションのルール説明、午後はグループに分かれてのディスカッション、二日目午前はグループ毎のプレゼンテーション、午後に議論のまとめという手順になるでしょう。詳しいスケジュール設定、新しい試みなどはこれから FD 委員会で検討していくことになると思います。

#### ②その他のカフェ企画

その他にも FD カフェという名称を冠して、座談会形式、ワークショップ形式で様々な企画を立てるべきと考えます。この企画はテーマによっては学友会との協議で決定していくことが望ましいでしょう。現在のところ、「制作展をどうするのか」、「被災地支援をどう考えるか」、「合評について」など、教育の質的向上と関連がありつつも、学生が取りつきやすい具体的なテーマ選択をすべきと考えています。

また、問題を抱えた学生への対応など、昨年度までのテーマも引き継いで企画立案したいとも考えています。その際には、学生の参加は見送り、教職員間での理解共有を目指すことになるでしょう。

開催場所・規模については、臨機応変、場合によっては中庭での青空カフェでもよいと考えます。オープンな雰囲気を演出することが大切と考えます。開催日については、オープン・キャンパス、学園祭、な

どに合わせるなどのプランを立てていますが、継続的に検討する必要があるようです。FD委員会ではなるべく早い時期に年間スケジュールを確定したいと考えています。

### ③カフェ以外の企画

シンポジウム、講演会等も企画提案していきたいと考えます。

以上。

以上の段階を経て、FD委員会は学生が自らの学びを振り返るための授業アンケート、学生による自己点検評価としてのアンケートを提案していくことになる。

なお、それでは教員の授業に関する評価にはならないという疑念に対しては、教員の“ティーチング”は直接の評価対象とならないが、学生の学びの姿を通して、ネガの形で浮かび上がることになるとの説明で対処することとした。

### ⑦FD委員会年次計画の策定と承認

以上の複数の構想をもって、FD委員会は5月19日に委員会内で以下に示す平成23年度年次計画を策定、6月8日の大学評価会議において承認を受けることになった。先行して活動を開始した部分もあったが、正式にはこの時点を持って平成23年度FD委員会の活動が開始されることになったのである。

## 2011 年度 FD 委員会年次計画

### はじめに

FD 活動は改正大学設置基準において義務化された。本学でも既に FD 委員会の取り組みにより、教育方法に関する講演やディスカッションの機会が定期的に設定され、参加率もますますの状況である。これまでの FD 委員会の取り組みにより、学生の学力低下に対する対策において教員間の意識共有が進められたことは評価すべきである。

ただし、その間に国内外での FD に対する考え方は大きく変化を見せている。現場の抱える問題に対応するための“教育方法の検討”が主流であった時期から、中央教育審議会の『学士課程』答申に明示されたように、ここ数年では、課程教育全体を統一的に見てその教育理念を検討し、教育方針を教員間で“共有”することへと重点が移されつつある。つまり、FD 活動には組織を挙げて問題意識を“共有”する上で大きな効果が認められ、その“共有”を通して、大学教育の質的向上に向けた教員全体の組織的な取り組みを引きだすことによってこそが今後ますます重要になってくると思われるのである。

また、これまでには“いかにして教えるか”という教師目線が FD の主要関心対象であったが、これからは“いかにして学ぶか”という学生目線で教育システム全体をとらえるという発想も必要になるだろう。特に、演習科目の運営において、一方的な技能・知識伝授では授業が機能しないことが容易に予想される。学生がどのような目的意識を持って学ぶのか、そういった学びの場を教師がどのようにコーディネートしていくのかが全教員の大きな関心領域になるであろうし、そのポイントに対して大学全体が組織的に動くことが望まれる。

本学の芸術大学としての 40 年の歩みを踏まえつつ、さらなる飛躍のために、芸術大学としての自由な発想を駆使して FD の活用方法を改めて検討し、社会的負託に積極的に応える魅力ある学園創造に委員一丸となって取り組んでいきたいと考える。

2011 年度 FD 委員会

### I 基本方針

1. 大学評価会議の決定事項に沿った FD 活動の企画・運営
2. 教育方法の改善にテーマを絞った“狭義の FD”から、課程教育の検討・改善、教育目標・理念の共有を目指す“広義の FD”へ
3. 職員、非常勤教員の活動参加
4. “ティーチング”から“ラーニング”へ
5. 学生の参加を促し、課程教育方針に関する意識共有を推進する
6. 情報の公開

### II FD 委員会の年間業務目標

1. 大学評価会議の決定事項に沿った FD 活動の企画・運営
  - 1-1. FD 活動に関する年次計画を年度前期の大学評価会議に提案する。
  - 1-2. 大学評価会議の決定に沿って FD 活動を推進する。
  - 1-3. 年度後期の大学評価会議において中間報告を行う。
  - 1-4. 年度末に FD 活動報告書を作成し、大学評価会議に提出する。
2. 教育方法の改善にテーマを絞った“狭義の FD”から、課程教育の検討・改善、教育目標・理念の共有を目指す“広義の FD”へ

2. 教育方法の改善にテーマを絞った“狭義の FD”から、課程教育の検討・改善、教育目標・理念の共有を目指す“広義の FD”へ
  - 2-1. 講演形式の FD 活動のみならず、ワークショップ形式の研修やシンポジウム、座談会などの活動形式を取り入れる
  - 2-2. 『大覚寺学園教育憲章』に示された教育目標を踏まえ、その達成のための方法論をディスカッションすることを活動の主軸に置く。
  - 2-3. 参加者の意識共有、意識集約のための方法論を研究、実践し、報告書に記載する。
  - 2-4. 今年度中に実技部門における演習授業の目的および方法について意見の集約を達成する。
3. 非常勤教員、職員の活動参加
  - 3-1. 非常勤教員との意識共有を図るため、実技系非常勤教員を中心に参加実績を挙げる。
  - 3-2. 教職員間の意識共有を図るため、職員の参加を積極的に推進する。
  - 3-3. FD と SD の連携を強化する。
4. “ティーチング”から“ラーニング”へ
  - 4-1. いかに教えるかではなく、いかに学ぶかをテーマに選び、FD 活動を構想する
  - 4-2. 学生アンケートにおいて、教員の指導を評価する視点から、学生自身の学習を自己点検する発想に切り替える。
  - 4-3. 学生の学びへの意識変化を調査するための具体的方法を策定する。
5. 学生の参加を促し、課程教育方針に関する意識共有を推進する
  - 5-1. FD 活動に学生の参加を促す
  - 5-2. 学生部との連携を通して学友会の協力体制を構築する
  - 5-3. 学生と教職員の間の大学での学びをテーマとした座談会を年間 3, 4 回をめどに企画、実施する。
6. 情報の公開
  - 6-1. FD 活動記録を大学広報に掲載するほか、ブログ形式等で大学 HP 上に掲載する。
  - 6-2. FD 委員会の議事録等の掲載を検討する。
  - 6-3. FD 委員会の年間活動報告書を HP 上に掲載する。



## 第2章

### FD カフェの実施状況

- 2-1. 第1回 FD カフェ
- 2-2. 第2回 FD カフェ
- 2-3. 第3回 FD カフェ
- 2-4. 第4回 FD カフェ
- 2-5. 第5回 FD カフェ
- 2-6. FD カフェ・アンケートの分析

## 第1回 「授業おもしろい？」



2011年7月6日 17:30～19:30

京都嵯峨芸術大学 講堂棟4階講堂

主催: FD委員会、学友会執行部(共催)

参加者: 学生約40名、教職員26名

## FD Cafe 第1回「授業おもしろい？」

### ごあいさつ

みなさんこんにちは。FD 委員会委員長の神谷です。

本学の FD 委員会は、昨年 度まで教員の教育能力を向上する為の教職員の勉強会のようなことを企画してきました。今年は少しその趣向を変え、学生さんに参加していただいて色々な意見をお聞きし、普段の授業や教育環境の向上にフィードバックする為の機会を設けよう、ということになりました。

今日はその第 1 回目で、「授業おもしろい？」をテーマにざっくばらんに話し合いたいと思います。おもに学生のみなさんに語っていただきます。授業に関する話題であれば何でも結構です。例えば「こんな授業があつておもしろかった」とか、またその逆の場合もあるかも知れません。そっちの方が多いのかな。僕たち教員としては授業をより良くする為のヒントを求めており、ここは直した方がいいよ、という意見がたくさん聞けたら、と思っていますので、遠慮なくお話し下さい。

とはいいうもののこの状態でガヤガヤとはしゃべれませんから、話し合いがしやすいように 5 つのグループに分けます。教職員と学生さんが一つのグループになります。教員を前にして不平、不満は言いにくいですけれども今日はそういう場ですから遠慮なく発言して下さい。そして教職員のみなさんは学生さんの発言をなるべく促すようにお願い致します。

また、今日の座談会のルールを三つ決めました。

#### 1. テーマは「授業であること」に絞って下さい。

熱中してくると話が色々脱線てきてそれも面白いんですけども、討論の話題 は限定しましょう。

#### 2. 他人の発言を否定しないで下さい。

これは大事なことです。他人の意見は「なるほどそれも一理あるな、」と思って 聞いて下さい。

#### 3. 教職員は会話の場をなるべく仕切らないで下さい。

学生同士の発言や対話を促す役割、と思って下さい。

今日のスケジュールを説明します。今からグループに分かれてディスカッションをします。授業についてあれやこれやをお話しして下さい。これは 30 分間を予定しています。その後グループごとのプレゼンテーションをしていただきます。それぞれのグループで出た意見を発表していただきます。それぞれのグループで出た意見を発表していただきます。これも 30 分間を予定しています。

最後に全体でのディスカッションを 30 分間行います。出てきた意見を見ながら、じゃあどうすれば良くなつて行くのかな、ということを皆さんとともに考えていきたいと思います。7 時 10 分～30 分くらいの終了を予定しています。

この後、参加者たちが 5 つのグループに別れてグループディスカッションとなりました。

## グループプレゼンテーション

### A チーム



- ・教員は学生に興味があるのか（将来のこととか）。
- ・（講義）教員がプリントを忘れたりして授業 がうまく進行しない。
- ・教員自身が授業があることを忘れていた。
- ・内容と実習時間が合っていない。持て余すなら自主的にやるのも良いかも。
- ・実習中放置されている。技術指導が少ない。
- ・説明が的外れ、下手。授業後、個人的に質 問に行き、確認しながら聞いたら理解できるが、そもそも授業中にうまくまとめて説明して欲しい。
- ・授業内容に実用性が無い（教員を利用しろ！と言われる）。
- ・全員に分かり易い授業の方がよい。
- ・学生の興味のギャップが大きくて悩む。工夫するのに興味がある（教員）。
- ・教員が学生に興味が有れば壁は埋まる。
- ・やる気がある学生は教員のところに行くし、 そこで話せばよい。
- ・実習は学生の伸び率で判断している（教員）。
- ・人間としての学生に興味を持ってほしい。学生を洞察する力が足りない。
- ・課題で判断。「モノ」を通してのコミュニケーション。
- ・教員の熱意や周囲の人々のお陰で上手になった。本気でやってくれている。  
自分はそれに応えたい（一方で絶対化される面も有る）。

### B チーム



- ・朝ねむたい。
- ・私語がうるさい。授業の邪魔になる場面で教員がそれを注意しない。
- ・午後集中出来ない。

- ・わかりにくいプリントはいや。
- ・受講態度の温度差（頑張る学生とてきとうな学生の差が激しい）。
- ・出席管理の甘さ。
- ・大学生としての自覚が無い（おしゃべり、欠席）
- ・ビデオまかせの講義。
- ・実習にたいする甘さ（合評休む、提出の遅れ）。

C チーム



- ・授業のレベル設定が低い。ハイレベルにも対応せよ。
- ・いろいろな講義はすべて自分の専門ジャンルにフィードバックできる。
- ・くだらないことは一切ない！（意識の高い学生であれば）
- ・他専攻の授業を受けたい（いろいろ条件がムズイ！短期留学でも）
- ・一つの課題で毎日教員が変わる。引継ぎが甘く、アドバイスの方針がブレてる。
- ・他専攻の合評を見たい（仲間の意見がほしい、言いたい）。
- ・家で制作してしまう。
- ・締切に間に合わなくても大丈夫～～な空気。
- ・自主制作（課題だけではダメでしょう）はまわりに影響を与える。

D チーム



- ・スライドの情報等を授業後、配布してほしい。授業をあとから動画で見たい。
- ・授業のスライドを携帯カメラで撮るのはいいのか。
- ・喋るだけの授業よりスライド等を使ってほしい。
- ・作家等をたくさん授業中に紹介してほしい。
- ・異分野との交流をはかつてほしい（技法、材料）。

- ・実習時間を延ばしてほしい。
- ・自分の意見を教員に受け入れてもらえない。
- ・授業（夏休みの課題等）の目的が明確に説明されない。
- ・授業の開始時に今日の目標等を説明してほしい。
- ・教えてもらうより、自分で学んで行く方がよいのか？何もかも教えてもらう必要はない（課題による）
- ・教えてもらえることは全部教えてほしい。
- ・パソコンの使い方の授業は必要か。放課後に自分たちで描いている。

E チーム



- ・先生があわてている（一人の学生だけの対応に追われて周りが見えていない）。
- ・私語を注意しない。
- ・説明が下手。
- ・AV ホールの椅子が嫌（座り心地、使い勝手が悪く、授業に集中できない）。
- ・教員が好きなものがわかる授業は聞いていて楽しい。
- ・教員が授業時間中に食堂でお昼を食べている。教員は教室にいてほしい。  
教員の居場所が分からないので何か一言ほしい。
- ・出席をとってほしい。
- ・大事なところは板書してほしい  
(板書しないのだったら繰り返し言うか、ゆっくり言ってほしい)。
- ・授業に関係のない話が多い（面白いんだけど）。
- ・助手をうまく使って授業を進めてほしい（必要な道具を準備させたりとか）。
- ・教員の制作している姿を見たい。アーティストとしての話を聞きたい。
- ・資料を読むだけの教員は嫌。熱心な教員がいい。
- ・話が横道にそれること自体はよい。
- ・他大学と学生の姿勢が違う（他大学では教員を捕まえた学生勝ち）
- ・（嵯峨芸は）教員と学生の距離が近い  
(親しい距離が馴れ合いになっているのでは?)。



## 全体討論 1

全体討論は各グループより行われたプレゼンテーションをもとに、さらに突っ込んで聞いてみたいことや提案したいことなどの発言を参加者から募り、それに実行委員を代表して佐藤先生が答えていく、という形で行われました。以下がその討論の内容です。

### 1. 教員の学生管理について

学生：

学生には真面目、不真面目の2タイプの学生がいますが、教員が不真面目な学生の管理をしてくれません。教室がうるさくてしょうがないときがありますが、なぜこうした状況を管理しないのでしょうか。教室の管理は教員の務めではないのですか。

教員：

確かに必要に応じて教員が注意を喚起するような場面も必要でしょう。でも、学生の厳密な管理を突き詰めていけば、大学教員は「教育者」ではなく「管理者」になってしまいます。学生の管理は大学教員の本義ではなく、大学は入ってきた学生を管理する場所ではないと考えています。



---

### 2. 教員の研究活動

学生：

教員の作品など研究活動の中身を知りたいです。先生方のこれまでの仕事や、今手掛けている仕事を見ることでこの業界でやっていく決意を高めたいと思っています。

教員：

今回の FD Cafe は学生と教員が同じ平場に座り、議論を交わすという貴重な経験をしました。学生、教

員の意見を寄り合わせ、意識の共有部分を広げることが大学全体の教育力のアップにつながるでしょう。また教員の研究活動をみせることで学生と教員の意識の共通化を図りたいと思います。

---

### 3. 大学生像について考える

教員：

自らを「学生」として捉えているか、あるいは「生徒」として捉えているか、という言葉のずれが見られますが、これはお互いの認識のずれともいえます。彼らは「大学生」という立場にあり、自らを「学生」として考えるのと「生徒」として考えるのとでは問題に対する姿勢が変わってくると思いますが、このことについては意識をしておく必要があるのではないかでしょうか。

教員：

「学生とはなにか」ということを考えないとダメですね、という意見はグループディスカッションの中でも出てきました。この究極としての「理想の学生象」をめぐる問題は今年度の FD Cafe の最終的なメインテーマとなっていくはずです。

---



### 4. 学生 / 教員の認識の「ずれ」

学生：

学生が思っている「学生のあたりまえ」と「教員のあたりまえ」教員が思っている「学生のあたりまえ」と「教員のあたりまえ」にはお互いに認識の違いがあり、そのために教員の側には「学生の求めているものが分からぬ」という問題が出てくるのではないかでしょうか。小学生から授業を受けていて、その人生のなかで一番おもしろいと思ったのが（嵯峨芸の）某先生の授業でした。それは教員の側に学生に対する「愛」があるからなのではないでしょうか。学生個人に対してあまり関心を持たない教員と、興味を持って接する教員がいて、そうした関心を持たない教員がいることに対して問題を感じています。

教員：

学生個々に対しての関心が教員によりまちまちであるのは確かですが、それは果たして学生と教員の意識の乖離を生む要素として本質的なものといえるのでしょうか。（学生個々に対する関心については）教員個々の努力によるものであって、大学 全体の取り組みとして行うべき問題とすることについては疑問を感じます。学生 個々に关心や愛情を持つということは必要な面もあるでしょうが、こうした ウェットな関係性を持つことだけで大学教育の質的改善に繋がるのでしょうか。教える側と学ぶ側には確かに微妙なギャップというものがありますが、このギャップの本質とは何なのか、 性急に結論を出る問題ではない

ようです。もしかしたら (FD Cafe の) 年間の話し合いの中で見えてくるものかも知れません。

学生：

関心や愛情といった感情的な部分だけで教育の問題が明らかになるわけではないだろうし、そうした人間関係だけを重視して（学生が）学生生活をしていいのだろうか、と思いました。



---

## 全体討論 2

### 5. 今回の話題の焦点

学生：

今回出された問題をふるい分けして分類し、それについての改善点を（ただ単に）話し合うだけではなくて、学生も教員もすぐにでも実行できるものは実行する、というように実際に動いてみるとよってこの話し合いは意味を持つのではないか。システムなど客観的にみた大学の改善点を話し合うべきだと思うし、大学内での人と人との関わり合いについて考えるということも巡り巡って社会性の獲得に繋がっていくでしょう。また、学生の今の状態を確認することで教員は学生を教えやすくなり、教員の価値観を共有することで学生も新しい価値観を学びやすくなると思います。

教員：

プレゼンと討論の中で挙げられた問題は、出席、私語などの学生管理や、スライド、板書など授業内容の説明の仕方、といったカリキュラムのシステムの問題と、教員一学生間の認識のずれや情緒的つながりの必要性などコミュニケーションについての問題の二つに集約されると思います。こうした枠組みの中で対応すべき点を考えていくべきではないでしょうか。



教員：

うちの大学は小規模なため、比較的学生の面倒見がよいとされていますが、「面倒見がよい」ということが即ち「よい大学」ということにつながるでしょうか。今までの議論を振り返るとそれは本質的な部分では無いと思います。またカリキュラムのシステムを厳密に適応するのが大学なのだろうかと考えた場合、そうではなく、システムをいちおう尊重はするが、それを完全に守るということは大学らしさ、大学生らしさと必ずしも一致しないこともあると思います。

ではどこに授業の醍醐味、授業の本質があるのか。これについては我々（教員）のなかでは解答はありません。しかし大学とは「目的を共有するための場所」なのだ、ということは言えるのではないかでしょうか。情緒を分かち合う場所、システムに縛られるための場所ではなく、ある「志し」を持っているもの同士がお互いに手を取り合うということが大事だと考えています。

---

## 6. 学生からの感想

学生：

この FD Cafe に参加している人たちは「授業」について考えることに熱意があり、今回はとてもよい感じで話し合いを進めることができました。しかしここに参加していない学生たちにはこの FD Cafe で話し合われた内容やこの場の熱意は共有されないし、またここでなんらかの結論や提案が出されても、「それは私たちには関係ない」ということになるのではないかでしょうか。大学や授業といった問題に対し、そのようななかたちで学生たちの間に熱意、関心の度合いのずれがある ことに不安を感じています。

今回の Cafe は社会性やコミュニケーションといった大きな枠に話題が発展していきましたが、「授業おもしろい？」というテーマから想像していた具体的な問題からは焦点がそれていったように感じます。結局「授業」ってどうすれば良くなるんでしょうか。教員が「熱意をもって（授業を）受けましょう」と学生に言えばそれだけで大勢が熱意をもつわけではないでしょうが、こうした熱い学生がある程度この大学にいるのだ、ということを見せつけられれば、他人の行動に影響を受けやすい日本人の 性質から言って、全体の熱意は上がっていくのではないかでしょうか。やる気の無い学生はどうせどんな対応をしてもやる気が起きないだろう、というあきらめで 何も改善をしないのではなく、こうした活動を多くの学生に伝えることでいい循環を生み出すきっかけにしたいと思います。この Cafe で話し合われたことの多くは共感出来たし、自分が感じているようなことを他人も感じているんだな、と思いました。この活動に参加する層をどんどん広げて、本当に大学全体が意識を共有する状態ができたらもうそのときには「話し合い」を行う必要はなくなっているのではないかでしょうか。



教員：

今回の Cafe の話題が授業に関することからずれていったことは主催した委員会側の陰謀でもあります。今日の参加者は学生全体の 1 割程度に過ぎず、この場では意識の共有ができていたとしてもそれで大学全体が問題意識を共有できているとはいえない状態であるのはご指摘の通りですね。

この FD Cafe の模様は FD 委員会、学友会執行部で編集し、ブログ形式で大学 HP 上に掲載する予定なので、それを通じてこの場に参加していない学生にもじわじわと話題が広がることを期待したいと思います。



## 終わりのあいさつ

みなさんお疲れさまでした。初めての Cafe をようやく終えましたが、今日の話し合いの結果をどのようにまとめていくか、これからじっくり考えていかなければなりません。今のこの疲れがのちほどには心地よい疲れになっていくことを願っております。

予定の時間を大幅に越えてしましましたが、とても面白い会ができたと思います。みなさんどうでしょうか。今後この Cafe は 9 月、10 月、11 月、12 月とあと 4 回開催する予定で、その都度告知していきます。今回参加して面白かったと思った学生さんは友達にもぜひ紹介していただき、次回からたくさん連れてきてくれるとありがたいです。

それではみなさんどうもありがとうございました。

## 第2回「合評」



2011年6月28日 17:00～19:00

京都嵯峨芸術大学 講堂棟4階講堂

主催: FD委員会、学友会執行部(共催)

## FD Cafe 第2回「合評」

### ごあいさつ

では、第二回 FD カフェをオープンします。非常に殺風景なカフェなのですが座談会を行います。  
第一回目の FD カフェは 7 月に行いましたが、その時来たよ～という方、どれぐらいいらっしゃいますか？  
(举手) 初めての方が半分ぐらいで嬉しいことです。



---

### 本日のディスカッションのテーマ

今日は第二回目のカフェでテーマは「合評」です。みなさんは合評というものを一度は経験していると思います。今日はその合評について、うちの合評の仕方は面白いよ～とか、毎回ここが辛抱できないという意見、うちではこれが普通だったけれど、よそでは違ってたんだという感想など、色々なことを話してみましょう。教員もいますから、これどうなってるんですか～とか、こういう所が素晴らしいなど、普段言えなかったメッセージを今日は直接伝えてもらって結構です。色々話してみましょう。

まず五つのグループに別れ、合評について考えていることをグループでディスカッションします。各グループにはホワイトボードが準備してありますから、そこに話し合いの内容を記録していきます。5 時 50 分から、ディスカッションで出た意見を各グループ順番にみんなの前で発表します。6 時 20 分から、今度は参加者みんなで喋ります。日頃思っていることを直接先生に向かって言う機会は中々ないので、こういう機会に意見をどんどん出してみましょう。

---

### FDについて

「FD」というのは何年か前から大学機関等で流行っていますが、「Faculty Development」の略で、教員の教育能力開発といった意味をもつ用語です。これまでの嵯峨芸大 FD 委員会の活動は僕ら教員のための演習みたいなもので、より良い授業をするためにどうすることを勉強したらいいのか、といったことを教職員同士で話し合っていました。

今年はそこに学生さんの意見を交え、より良い授業をするために一緒に考えてみる、という会にしました。学生のみなさんと僕たち教員、双方の勉強のための場です。活発な話し合いになることを希望しております。

この後、参加者が A、B、C、D、E の五つのグループに分かれてグループ・ディスカッションを行いました。

## グループプレゼンテーション

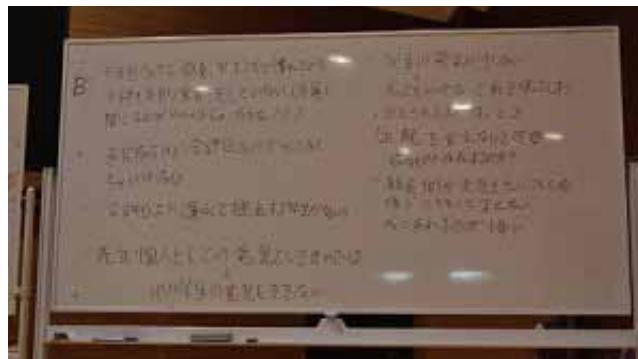
それではグループ毎のプレゼンテーションを行います。各グループから出た意見を簡単に発表してもらいますので、それを発表者を決めてください。学生さんに発表して頂けたらベストですけれども、教員が担当していただいても結構です。

A チーム



- ・任意参加型の、来たい人だけ來たらしいですよ、という合評ではダメ。
- ・厳しい批評を求めるタイプと、へこむタイプの学生がいて、厳しさのさじ加減が難しい。
- ・教員が学生の考え方や気持ちを真剣に掘り返してくれていると実感できるとき充実を感じる。
- ・教員が一方的にずっと喋っているのではなく、学生の意見を中心にして合評を展開して欲しい。
- ・教員のコメントが学生全員に行き渡らないことが多い。
- ・教員のコメントが抽象的で「これはいい、いいですねえ」で終わってしまう。
- ・教員のコメントが理解できないまま合評が終わってしまうことが多い。「ヘタウマ」と言われその意味が分からなかった。
- ・自分に近い時代感覚を持った後輩にもきちんと伝わるかということで、三回生が二回生に作品のプレゼンテーションをしている。
- ・学生各自が良いと思う作品に投票し、その理由を投票者自らが発言し説明する。vv 得票ゼロで話題に持ち上がらなかつた学生は自己分析とし、その代わり話題に上がつた学生の意見を聞いて勉強してもらう。

B チーム

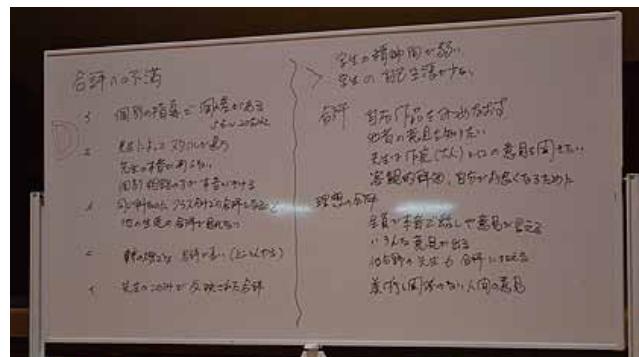


- 卒業制作展に間に合えばいいと考える学生がいて、合評はただの途中報告みたいになってしまっている。
  - 自分から主体的に発言をしなかったり、自分の発表が終わったら他の学生の合評を聞いていなかったりする学生が多い。
  - 教員や他の学生に突っ込まれないような、「正しい意見」を言わないといけないという不安が強いのではないか。
  - 高校の時の合評では学生が先に意見を出し合い、教員はその後でそれらの意見に対してコメントをするという形式で、凄く盛り上がっていた。
  - 「絵画道場」（四大・短大油画学生の企画個展）では一人の学生の作品をめぐり、色々な学科の学生が集まってディスカッションを行っているが、その形式は他の分野の合評の参考になるかもしれない。
- 

#### Cチーム

- 自分の作品だけではなく人の作品の批評に対しても引っ込み思案になってしまっている。
  - 厳し目で合評して欲しい学生と、言われたらしゅんってなってしまう学生がいる。
  - 他の人の合評の時に寝ているだとか、自分本位過ぎて他の人の考え方や意見とかを聞かない学生がいるのは問題だ。
  - 合評はそれぞれの課題の評価の物差しをみんなで共有していくプロセス。
  - デザインでは自分だけじゃなくチームプレー。だからこそ、人の作品に意見を出そう、興味持とうというのが合評のマナー。
  - 中間合評を設けたらいいんじゃないかという話もでてきて、やってみたいけどそれぞれ作品を描くスピードが違うのでなかなかできない。
- 

#### Dチーム



- 先生によって合評のスタイルが違う。できれば学生の話す機会がある合評がいいなあと思う。
- 先生がどこまで本音を話しているか分からなくなるときがあって、個別に

相談しに行ったときの方が割と本音を聞けるのではないか。

- ・同じ学科なのにクラス分けがあって、同じ学科なのに違うクラスでの合評が聞けない。
  - ・傾向として学生の精神面が弱い、学生の自己主張が少ないとみんな思っている。
  - ・合評とは自分の作品を見つめ直す機会であったり、自分の作品に対してみんながどう思っているのかを聞く機会。
  - ・先生は作家として、大人として意見を聞かせてほしい、それから客観的評価も聞かせてほしい。
  - ・全員が本音で話し合う、意見が言える、色々な意見が出る、多分野の先生も合評に加わる、美術に全然関係のない人の意見も聞ける合評が理想。
- 

#### E チーム

- ・合評中に自分の主張をせずに空気を読む発言をしてしまって、その場を無難にやりすごしてしまうのが問題。
  - ・学生が合評を受けるまでの作品完成度に達していない、という場合が多々ある。先生も評価することができなくて、さわりだけアドバイスをすることが多いようを感じている。
  - ・押したらへこんだまま。他のグループの意見と同じだが、やっぱりそういう学生さんが多いようだ。
  - ・観光デザインは制作過程で常に第三者が入ってきてクレームや意見を言うので、作ってる最中同時進行で常に合評されているようなものだ。
  - ・毎回一人は泣いてしまうような厳しい合評があって、この場合は刺激があると感じている学生が多いようだ。
  - ・明確に課題提示をしてほしい。
  - ・学生に期限に間に合わせようという認識が薄く、合評の目的について教員と学の間で認識の差があるようだ。
  - ・合評はプレゼンの場という意識がデザインの場合は割とはっきりしている。
  - ・絵画系の場合、先生が意見するとその中に少なからず個人的思考が入ってしまうので、制作中はあまりアドバイスをしない傾向がある。
  - ・技法ばかりで内容を見ないところに多少不満を感じている。
  - ・自分の主張をあまり持たない、言えない学生が多い。
- 

## 全体討議

司会者：

ありがとうございました。色々な分野、色々な専攻の学生が集まって合評について話し合ってもらいました。教員側の問題点であったり、学生側の問題点であったり、グループ間で共通していることが多かったと思います。例えば、意見を全く言わないであったり、何か言われるとシュンとしてしまうとか。私が思うにここにはかなり優等生的な人間が集まっているように感じます。どうでしょう？学生の意見も出でてい

たわけで、まず誰か先生、意見を討議を進める上で、何か言つていただけますでしょうか？

教員 A :

ちょっといいですか？確認なんですけれども、各コースで合評の前に合評趣旨を書いたプリントが学生さんに渡っているんですか？デザインの方は課題がはっきりしているから合評がしやすいという意見がありましたが、美術系の合評だと作品持ち寄って合評という状況ですので、これまで渡っていなかったと思うんですけど、渡しているコースなどはありますか？

教員 B :

イラストで言うと、合評は結局ずっと作ってきた課題の合評なんで、何の合評をするのかはそういう意味で明らかなんですけれど、今回こういう視点で合評するよっていうような意味でのレジュメというのは配ったことがないです。

教員 C :

メディアデザインは一応企画書というのが大前提にあって例えばWebサイトフローチャートとか企画書っていうのは学生個人が人数分作成してそれを元に説明しています。

教員 D :

最近の傾向で、シラバスの中に評価の基準というのが明確に示されること、という文部科学省の指導があるんですね。我々も、最後の評価の時にこういうポイントで評価します、というのをもっと事細かに書かなかん時代に突入してきてるんですね。評価の趣旨を明確にして、どこが評価のポイントなのかを明確にせよという指導があるもんですから、ちょっとその辺をどうなのかなあ、というのをお聞きしたい。ほんまに合評は必要なのかと、必要だという意見に対してどういう理由を教員側が提示できるのか、というのをお聞きしたい。

司会者 :

D先生が言われたのは、シラバスの中で評価の基準っていうのはきっちりあって、そこに多分合評のあり方っていうようなものも書かれていて、それを学生に徹底することがより良い合評を作っていく方法の一つではないかというご意見とお聞きしてよろしいでしょうかね？

教員 E :

D先生の意見を受けてなのですが、かなり結論に近い部分をいきなりこう攻めてきたような気がします。学生の方からは問題点がいっぱい出てますが、シェンとするなど学生の抱えている問題点ばかりを追及してもあまり成果は上がらないのではないか、あまり深い議論ができないのではないかと思います。合評というのは授業全般、教員と学生の間で作りあげていくものと思いますので、どのように両者が協力して合評を作していくべきなのか、ということを軸に今から議論して言ったらどうかというのが私の提案なんですが。

司会者 :

良い合評をしていく色々な問題があると思います。分野個々の事情もあるでしょうけれど、共通していることがみなさんたくさんあって、まずは教員側がある種対応を考え話し合っていくことで解決できることが多いと思います。何かこう今の提案に続いて、いい合評を作りあげていく手法として意見が先生の方からありましたら、お話を聞いていただけるでしょうか？学生でも構わないです。

教員 A :

油画分野は造形系ですが、課題表、課題シートを作つて、そこにテーマや制作進行、評価ポイントに対する指導のポイントなどを書いて配つてます。ガイダンス時に配つて後、絶えず読み返してくれる人は少ないんですが、一応その課題の目的を示してます。でも、今回の各グループの発表を見てて気になるのが、

合評に求めるものが結構幅広いんじゃないかな、と。厳しく叱ってハードルをきちっと示してほしい人もいるでしょうし、優しく褒めてもらいたい人もいるでしょう。自分の作品の評価にしか興味がない人もいるでしょう。同級生と先生とでディスカッションをしてみんなの意見を聞きたいという意見もあったり。

ところで、教員側からすると合評のパターンが基本的にいくつかストックがあつて、二回生の前期には教員が割と一方的に喋ります。で、後期になると意見も出やすくなり、プレゼンテーションで意見を言ってもらいうながら、ディスカッションしていくパターンもあります。あとは、時間オーバーを絶対にしないと宣言をして、発表したい人から順に発表して話が尽きるまで話をしていく、甘く言ってほしい人厳しく言ってほしい人リクエスト制で手を挙げて、甘くと言ったら甘く言うというようなパターンもあります。だから、一回一回の合評を教員が意識的に運営していくべきだろうと思ひますし、合評のテーマについて学生に意識共有してもらう努力が必要ではないかなと思っています。合評を単なる区切りだ、別になくてもいい、という意見もあると思いますけれども、その場独特の空気というのが学生の刺激、ためになってるといいなと思っています。

司会者：

はい、ありがとうございます。方法論、パターンをその都度課題内容に対応して選んでおられるのですね。その他の先生別のご意見とかありますか？

教員 F：

私は3月までは工学部の教育に関わっていました。カリキュラムには学習目標というのがあって、それが一つ一つの科目に割り振られていて、それを教員と学生と一緒に達成するという、そういう感じで学科の教員全員が進めていくのですね。物凄く目標がはっきりしているんです。ここに到達したかしていないか。そういうのがだいぶ染み付いちやったんですね。だいぶ造形系の先生の方との意見と違うと思うんですけども。

学生 A：

油画分野の二回生です。個人的な話になるかも知れないですけど、やっぱり学生側の問題が多いなあと思います。合評が考える機会になっていないと言いますか、わ一合評や、怒られたらどうしようとか。そのところがまず引っかかっていて、でもその人たちを説得してもっとやる気出せよって言うのもまた違う気がして、何か難しいですね。合評に関しては、もっと学生が話して、他の学生の意見を求めて、それで先生からのコメントいただいて、まとめというのが一番いいなと個人的に思います。学生の意見がもっと飛び交うべきだと思うんですよ。控え目な人が多いし、思ってても言ってない人もおるやろし、もっとボロクソに言う機会があってもいいと思うし。最初に作品について話す側も、プレゼンっていう意識がないなあと思います。プレゼンとして話してやっていけたらなあと思います。

学生 B：

メディアデザインの一回生です。私は結構、意見をクラスの中でも言う方なんんですけど、他に意見を言う人がいる分、みんなが遠慮しないで意見を言えるのだと思っています。

司会者：

学生自身も他人の意見を聞きたいと思っていますね。自分の作品の評価だけではなくて、他者が評価されることも自分の作品に生かす。そのためには学生自身が色々意見を出していかなくてはいけないんですが、出ないのが実情なんですよね。何かうまく出る方法がどこかにあれば聞いてみたい。ということで、意見を活発に促す方法などを考えておられる先生はおられないでしょうか？

教員 G：

先ほどグループ・ディスカッションの中で話していたんですけども。ほとんどの合評会の場合、学生が自分の作品を一つ出して作品を自分でプレゼンして、周りを先生が取り囲んでそれに批評を加えるという

形ですね。もしくは、ずらーっと作品が並んで一つ一つ講評していくという形です。

さっき私たちのグループでは「罰ゲーム」という意見が出たんですね。合評会は罰ゲームみたいだと。それだと自分が思ったことをなかなか言えない。そうではなくて、自分の作品は過去のものとして、いわば自分の作品を他人のものだと思って発言していくと、もっと素直に言いたいことが言えて、要はこの作品を良くするにはどうしたらいいのかみんなで協力してコメントしていくっていう具合になる。この発想はおもしろいんじゃないかなあと思っています。

司会者：

自分が出展した作品も客観的に批評するってことですね。はい。他にできるだけ色々な意見をお願いします。

学生 C:

日本画分野三回生です。さっきの G 先生のお話に関してですが、学生が本音を語り合える空気作りについてちょっと意見があります。例えば、本音が言えない学生がいる一方で、本音が言える学生もいるわけじゃないですか。で、言える学生って大体口が立つから何でも言ってしまいます。そうすると言わない子はどんどん言わなくなっちゃう。言える子は多分、だんだん空気を読むというか、「私また発言してもいいのかな?」、「言いたいことがあるけどこれ今まで言ってもいいのかな」って考えるときがあって、あたしの場合がそうですが、そういう場合って先生はどう思うんですか? またこいつ喋ってるわ、とか思うんですか? H 先生、お願いします。

教員 H :

難しいですよね。話はずれるけれども、学生時代のことを思い起こしました。昔はね、このような合評会はなかったんですよ。批評会です。自分の制作意図を披露することもほとんどなくて、堅い偉い先生がおられて、その御意見をお伺いするという形で終わってたんです。そういう形でいいなんて今では思っていません。言葉通り「合評」、これは「批評会」じゃなくて「合評会」なんです。その合評を誰とするのかといえば、学生とするんです、学生と批評・議論しながら、意見を交わしながら、学生の考えていることを確かめながら。そして教師としての私の考えている価値観のような、そういうようなものをみなさんにも分かってもらう、そして共有できるか共有できないか、それを確かめる場。それが合評会だと思っています。そして学生にとってはその合評会を経ることによって、次の作品へのステップになっているしね。だから、一部の学生だけではなくてできるだけ全員に参加して欲しい、そういう風に思っています。作品に対する自分のコメントだけではなくて人に対するコメントなんかもしっかりとして欲しいし、それは自分の意見を確かめることもあるんですね。そういう形を促しているんですけど、先ほど司会者が言われるようになかなか学生の意見が積極的に出てこないというのが現状です。

先ほど僕の所のグループ・ディスカッションで、専攻科の日本画の彼が、コメントに正解を出さなければいけないという思いがあってなかなか意見が出せないんじゃないか、と言っていましたけれども、正解なんて本当はないですよね。私はね、昔から指導が厳しいって言われてきています。昔は確かにそうでした。自分の絵画に対する価値観っていうようなもの、できるだけ高くて、その高さに向かって自分も高めたいし、学生も一緒に歩んでいって欲しいと願って、凄く厳しい指導になっていた。年の差なんかもありませんでしたしね。でも、いまは学生との間にもう少し距離を取っています。四十年作家活動をしてきて、経験を積んできて、学生に対しては一定の先輩として、自分との距離や学生の今の状況などを見ながら指導している。それで重いです、ひとりの人だけが喋ってしまうとね。でも、それをきっかけに話が展開していく場合がありますから、抑えることはほとんどしません。

でも、全体に意見が活発に動く状況では多分言います。よろしいですか?

司会者：

ありがとうございます。一方的に先生が喋っているだけではなく、一人の学生が喋るだけでもなく、G先生のお話のように学生同士が一体となって、意見交換をする場をまず作ることが必要なのかな。それは多分難しいですが、もっと突っ込んで話し合ってみると解決の糸口が見えてくるんじゃないかなと感じました。

教員H：

ちょっとごめんなさい。今日は合評会の話に限って議論されてますので少し偏った形になるような気がします。合評会には大学のカリキュラムの編成の中での合評会の位置づけとか、それから課題制とかとの関わりがあるんですよね。最初のD先生の質問に応えるような形になるんですけど、昔とは課題制のあり方が変わっています。合評会のあり方もだいぶ違う、作品並べて批評する形は変わってなかったとしても、位置づけは変わっています。だから、教育全体の中でのカリキュラムの工夫として総合的に合評について話をするのであつたら、もう少し違う話ができるであろう、と感じています。

総合司会者：

ありがとうございました。前回もそうなんですが、FDカフェはきれいにエンディングを迎えて、こういうことだったんだねっていうようなものではないです。それが起こるとミラクルなんですけれども。こうして色々な意見が出てフムフムと言っている時間が有意義かなと思っております。いずれにしてもですね、最後にH先生がおっしゃったような、明解に合評とカリキュラムの絡みがみなさんに明確に伝わるよう、僕たち教師がしていかないといけないなあと思います。

はい、ではこんな感じで今日は終わっちゃおうかなと思っています。

## 第3回 「講義おもしろい？」



2011年6月20日 17:30～19:30

京都嵯峨芸術大学 第6演習室

主催: FD 委員会、学友会執行部(共催)

## FD Cafe 第3回「講義おもしろい？」

### -レポートによる記録-

「講義おもしろい？」をテーマとして10月20日に行われた第3回FDカフェは、通称「UFO棟」と呼ばれている大学ギャラリー棟の最上階に作られた象徴的な円盤形の講義室、第6演習室で行われました。この日のFDカフェはわりと硬派なテーマな為か、前回よりすこし少なめの学生が参加していました。教員の方がむしろ前回より多い印象でしたが実習系教員の割合が高く、講義系からももう少し加わって頂けたら議論の方向もより違ったものになったかもしれません。

先にお断りさせて頂きますが、実はこの第3回FDカフェは全体を記録した映像データが、原稿起こしを行う前にトラブルにより消失してしまいました。ご参加頂いたみなさま、誠に申し訳ありません。

そのため、今回のFDカフェは現場メモ、記録写真やFD委員の記憶をもとに構成したレポートの形で報告させて頂きます。いつものようなナマの発言をお届けする事ができず、お待ち頂いた皆さんには誠に申し訳有りませんが、今回こうした形式での報告となる事をご了承ください。

なお、FDカフェの常として今回のカフェにも結論めいたものは存在しません。会話の中からいくつかの興味深い話題が生まれ、それを転がす人、反論を加える人が現れ、しばらくすると会話はまた違った話題を追いかけて、それが転がったり止まったりを繰り返し、やがてお開きの時間を向える、という具合でした。それでは以下のレポートをご一読下さい。



### 1. グループ・ディスカッション

- ・講義は要らないのではないか。
- ・現在のカリキュラム制度では、大学は独自の判断でカリキュラムを柔軟に構成できるので、例えば講義を全て演習にしてしまうということも理屈では可能だ。
- ・体験型の演習授業は楽しいが大変なので、息抜きとして講義はあってもいい。
- ・講義の内容が難しい。
- ・雑学としては面白いと思う。
- ・大学の授業は雑学ではない！
- ・講義の目標を明確に冒頭に示すべきだ。その方が効率的。

講義について思うところをざっくばらんに発言してもらいました。「ムズイ！」という率直な感想が多いのは当然の事として、講義そのものをどう考えるか、という議論の種を見つけるにはなかなか至りません

一部を除き、ほとんどの学生は講義そのものには必要性が有ると考えているようです。ではなぜそれは必要なのでしょうか。またどのような形式でどんな内容の講義が理想といえるのでしょうか。いざれそうした事を話題に議論したいな、と思いました。

## 2. リベラル・アーツについて

司会者から、大学における「教養」ということを考える上で「リベラル・アーツ」という概念が本学では参考となるだろうか、という質問が出されました。概して「一般教養」という意味で理解されているリベラル・アーツの定義についてはこの場で深く吟味する時間はとれませんでしたが、他の教員から、その起源は古代ギリシアまでさかのぼり、古代ローマで「自由人の諸技術」として定義された七つの科目「自由七科」を指すこと、欧米の大学教育では歴史的にそれを採り入れ、リーダー育成に力を入れたことなどが例として挙げられました。これに関する話題として、2011年に他界したアップルの元CEO、故スティーブ・ジョブスのスピーチから「アップルはテクノロジーとリベラル・アーツの接点に立つことを目指している」という発言を取り上げましたが、大学中退者としても有名な彼のこの発言はヨーロッパ・アメリカ社会の教育環境におけるリベラル・アーツの影響力を示すものと思われます。ただし、ジョブス氏の言うリベラル・アーツが本当の意味で「自由人育成」としての教養教育の伝統をふまえたものであったのかどうかは今後みんなで確認していく必要があるかもしれません。



## 3. 普遍性について

ある教員が教育の基本的なあり方について、「普遍的」という言葉を用いて発言しました。それに対して別の教員が、「普遍」という言葉を用いるのはいかがなものかと反論をする場面がありました。つまり、普遍という言葉に対して肯定的な意見と否定的な意見が出されたわけです。

FD委員会なりにこのやり取りを解釈してみましょう。現代の思想状況からして、普遍という言葉はやや前時代的な印象を与えるのかもしれません。現代思想は西洋の形而上学を脱却することによって成立しましたから、その視点からすると、古代・中世の古い伝統を引く普遍という言葉を避けようとする気持ちも理解できます。

一方、「普遍」という言葉は、現在も大学という高等教育の場では生きている言葉でもあります。学生さんはこの世界、広い社会を高い視点から見渡して判断し、行動することを目指すべきだ、社会とのしがらみのない学生時代のうちに、社会に対する健全なスタンスを身に着けるべきだという理想は大事にすべきことのように思えます。

ただし、時間の都合もありこの議論はその後発展しませんでした。議論を続けるうちに大学に対する見方が深まっていたかもしれません。FD委員会としては少々残念に感じますが、その場の流れで様々な方向をたどるFDカフェですし、そのことも尊重したいと思います。

## 第4回「実習と演習について」



2011年11月26日 17:30～19:30

京都嵯峨芸術大学 中庭

主催: FD委員会、学友会執行部(共催)

## FD Cafe 第4回「実習と演習について」

ごあいさつ

総合司会者：

では、第四回 FD カフェを始めさせていただきます。本日は参加者が多くありませんね。いつものよう前に前半はグループに分かれてディスカッションをして、その後に全体討議を考えていたのですが、これではあえてグループに分ける必要がないようです。最初から全体で議論を始めるのはどうでしょう？

司会者：

では、こじんまりと始めたいと思います。今日いろんな都合で学生さんの参加数が少なく、今日はもうのっけからみなさんでお話ししましょう。ディスカッションを二段階に分けます。ディスカッション1、みなさんで意見をお出し下さい。6時半ぐらいまで、あつという間と思います。その後7時15分ぐらいまで、その意見を元にみなさんで話を深められたらと思います。そして7時半までまとめのお話をして今日は終わるらしいかなと思います。A先生が各意見を板書してくださるので、それも見ながらお話していただいたらと思います。今日は実習と演習についてのディスカッションです。みなさん最も重きをおいて勉強をされていることだと思います。始めは身近な出来事から感じられたことでもいいですし、もうちょっとこうすべきというアイディアでもいいですし、ざっくばらんにご意見いただけたらと思います。



### 1. 専門と専門外

学生 A：

実習についてなんですが、芸大の授業というのは学年や分野や授業のタイミングによって学んでいることが非常に多岐に広がっていると思うんです。その中で例えば彫刻分野の人が油画に関する専門知識をたまに勉強して、そこから新しいインスピレーションを得ることが大切だと思うんですよ。分野の専門を勉強するのは当然のことと大切だと思いますが、そこだけに固執しても世界が広がらない、足りない部分が出てくると思うんですね。授業の履修学生が決められていても、開放的にして相互に勉強できることが大切だと思うんですよ。今自分が勉強している四年制造形では、例えば休み時間に隣の教室に行って授業を聞いたり、先生の発言から知識や感覚を得ることができるのですが、仲間内での会話では、短期大学部でそういうのがあまりないらしく、先生によっても違うのでしょうか、「あなたはこの授業を受けていないのになんでいるんだ」という状況になったりするようです。場合にもよるのでしょうが、オープンで相互的な関係を持っていった方がいいんじゃないかなと思って、閉鎖的では学生の勉強に対する感覚も閉鎖的になってしまふんではないかなと感じますし、みなさんのご意見を聞きたいです。

司会者：

ありがとうございます。前期にフィギュア制作の授業をしてたんですよね。3週目ぐらいまで気付かなくって一人潜っていて、そういえばこの子の名前を呼んだことがないなあ、君誰？ということがありました。嬉しいですけどね、抽選に漏れたのかコッソリ来ていたのか、堂々と潜らずに来られたらいいですね。

学生B：

今の意見は1回生だからそう思うのかなって思います。いろんな分野に興味を広げておくのはおもしろいと思うし自分の勉強に良くなると思うんだけど、学年が上がってくるにつれて自分の制作に集中したいときに弊害があるんじゃないかなって私は思います。

司会者：

それは人それぞれだと思うんですよね。僕は見学に来てもらえると嬉しいタイプですけど。同じ芸術なんだけど違うジャンルがあって、違う所に行って刺激を受けられるのは大学のいいところですよね、先生もいろいろいるわけで。

学生C：

版画分野なんんですけど、教室結構狭くて2、3、4回生が一緒にやっています。摺るとき結構気を使うし、だからもうちょっとスペースが欲しいなあと思います。

司会者：

イラストなんか（ジェスチャーしながら）これぐらいの机があればOKなんんですけど、作業によっても変わってきますよね。他には何か、ではD君、何かお話があれば。

教務助手D：

僕が学生だったころより選択演習科目の科目数が減っている気がして、それが悲しいなあっていつも思っています。

司会者：

えっと、授業にどんな感想を持っていました？バラエティがあって色々できそうで面白いと感じながら見ていました？

教務助手D：

そうですね、いつも自分がやってる分野と別の専門的な分野が学べるので、そこで学んだことを自分のコースでみなが知らない技術として使えたり、できる限りとりたいなと思っていました。僕はデッサンの基礎、製図、コンピューターの3Dの授業を取っていました。あと、いつもと違う先生の合評というのも刺激的でしたね。

司会者：

いろんな専攻の人と会ったりして、中々面白いですよね。

学生E：

私も演習科目が好きでもっと増えたらいいなと思っています。デザイン系なので造形系の演習を受けたところ合評が全く違っていて、今学期を含めて3科目とっていますが、教職科目も含めて本当に視野が広がるなって思っています。抽選に漏れる人数が多いならもっと科目を増やしたり、対策を作ってもらえないかなあと思いますね。私は陶芸の授業を受けたんですが、造形の人とデザインの人とがいて、いつもと全然違う合評を見せてくれたら面白いだろうなあと思うんですけど。

司会者：

デザインは普段、思考を積み上げて論理的にものを作っていくんだけれども、そうではなく、のっけから感覚的な印象のフレーズが出てきて新鮮やったと。それはね、とても面白い話だと思います。あなたはデザインで陶芸をしたいと。ろくろのひき方を覚える楽しさもあるけれど、専攻外の先生や学生さんの気

質に触れてハッとするってとても面白いと思いますよね。

学生 F :

話は逸れるかもしれません…。私自身は油画分野ですが、陶芸の授業を一つとっていますが、陶芸ってあんまり知らなくて。器作るのかなぐらいにしか考えてなかったんですけど、実際土に触ってとても楽しくなったし、合評で先生が作品の形じゃなく、パッと裏を見て、陶芸って見えないところがいいんだよねって話をしてくれたときに、何かうまく言えないんですけども、感動しました。そういうのって油画ではなかなか出てこない日本人独特の感覚なのかなあとと思いました。

学生 G :

私も他にいろんな演習をとっています。専攻で平面やっているので、立体系の授業をとっているんです。立体と平面の表現の違いや考え方の違いを毎回考えさせられるのでとても良い機会だなって思っています。

司会者 :

やっぱり選択授業には専攻では教えてもらえない技術やジャンル特有の考え方を求めているんでしょうね。

学生 G :

そうですね、違った部分に触れることによって自分のやってる平面が何であるのか絞り込みやすくなるというか、考えやすくなると思います。あえて全く違う方面の演習をとったりします。結構何にでも興味を持つ方なので。

司会者 :

結構分かれるでしょうね。日本画描いてて生かせるようにデッサンの授業をとろうとか、逆に全然やつたことないジャンルを選択しようとか。

学生 H :

陶芸とか彫刻の演習はよく見るし私も参加してたんですけど、平面系の演習って四年制でありましたっけ? 例えば、油絵の中でも種類があるだろうし、もちろん日本画の中でも分野が分かれていますから、自分が専攻している以外の分野で演習的なものがあったらそれに参加することで新しい知識を深め、実習につなげられると思うんですけど、その辺ってどうなんでしょうか?

学生 I :

私、フィギュア制作の授業をとらせていたいんですけど、その前にも他の演習系の選択授業を取っていて、自分が普段学んでいない専門的な授業を受けてみると全然知らない道具や材料が出てきて、授業終わっても分かるように一生懸命ノートを作ったのですが、そこまでしないと持ち帰れないほど専門的であるところが魅力だし、受けるだけで満足とならない仕組みが選択演習系の授業で重要なんじゃないかなって思います。

司会者 :

僕は技術だけ教えるのに時間一杯精一杯で、もう少しみなが意見を言い合い、考える時間を持てたらなあと思っていました。

学生 J :

演習科目で教えている先生が他の分野の生徒に教えた時に感触が違うのかな、得るものも何か違いがあるのかなと思いました。

司会者 :

いい意見ですね。これで先生に話していただくことができます。ではB先生、選択演習科目を持っていらっしゃると思うんですけども。自分のいつもの学生さんを見ると違いますか。



## 2. 演習？実習？

教員 B :

僕は演習持っていないんですけど。あ、その前に学生のみなさんに質問したいんですが実習と演習の違いって分かりますか？今聞いていると月曜日の他領域の人もとれる科目を演習だと何となく思っているようですが、実はそうではないんですよね。

司会者 :

分かっている方が少ないと思うんですよね。分かっている人～（挙手3名）。

教員 B :

実習と演習の違い、実は教員もよく分かっていない。まず大きく分けて講義部門と実技部門がある。で、実技の中に実習と演習がある。講義的演習とか実技的演習とか、本学独特の言い方もありますが…。

教員 A :

講義、演習、実習の三つの分け方がありまして、授業外の学習時間がなく、授業時間内で全てが終わるのが実習、授業時間以外にも学習をする設定であるのが演習、それから、講義にも授業時間外の学習時間が必要です。だから実習と演習の区別というのは要するに授業時間以外に学ぶ必要があるかどうか、という所で本来分かれています。ただ本学の場合には授業運用の面で逆になっている場合があります。短大の実習と演習は本来逆の名称であった方がよろしいかもしれません。これは四大にもあります。実習科目では宿題が出てはいけないはずなんです、本当はね。でも出ますね。ということは実質上演習科目に等しいということになります。

学生 J :

他の大学でも演習・実習って分かれるんですか？

教員 A :

はい、分かれています。文部科学省が定めた大学設置基準に明記されています。

教員 C :

実際、芸術大学の実習っていうのはちょっと授業時間内じゃ終わらないものね。

教員 B :

僕が前いた大学はややこしいから講義と演習しかありませんでした。月曜日の他分野・他領域の人もとれる実技科目を演習という理解で今日は話をするんですよね。本来の質問に戻りますけど、僕は短大のグラフィック担当なんですが、今「暮らしのグッズ」領域のコンピューターを教えておりまして、「暮らしのグッズ」に必要なグラフィック知識とは何か考えて自分の知識を開くことは僕にとって刺激がある場だと思います。また、一年だけ「情報基礎演習」というコンピューターの演習授業なんですけど、いろん

な学生さんに対してどこにレベルや焦点をもっていくかかなり苦労した記憶がありますね。

### 3. どんな授業がいいの？

司会者：

ありがとうございます。いつもと違う学生さんを授業する時、性格とかが分からないので何か緊張するんですよね。実習の方は人間が分かってくるから、緊張感なくなってるときがあるかもしれませんしねえ。では、どんな授業がいいと思っているのか、素晴らしい授業とはどんな授業と考えているでしょうか？

学生 K：

短大ミクスト専攻科の学生です。授業の中でめっちゃ格好いい先生がいるんですけど、その先生の授業を受けているときはとても充実して、授業の後は次も頑張ろうと。アーティストとして尊敬、格好いいなあと思っているんですが…。

学生 L：

授業時間の半分ぐらい先生がいない方がいいです。実習授業で絵を描いているときに後ろにいると緊張して描けないので、ある程度放任してくれる先生の方がいいな。

司会者：

では、逆にいてほしいときは？

学生 L：

新しい技法やモチーフに取り組むとき、結構3時間目にいてるんですけど、4時間目とかになると先生がたまにいないことがあるんで、いてほしいときもあります。

司会者：

どっちやねん、という感じが（笑）。ここ意見欲しいなあという時がありますよね。では後ろの M さんはどうでしょうか？

学生 M：

短大の授業は本当に実践的な授業が多いんで、家で自由に描いている時と学校で描いている時と自分であまり差がないんで、学校でももっと色んな…すいません、ちょっとと言えません…。

司会者：

家で描いている時は多分独りですよね。周りに人がいる状態とは結構違いますよね。ありがとうございます。では、いろんな意見が聞けましたが、ここからそれを踏まえて、否定でもよろしいですし、話を深めていけたらなあと思います。

教員 C：

普段の専門とは違う演習授業、知らない相手への興味がみなあるんだろうし、僕もありますが、私たちが学校で使える時間って限られているじゃないですか。どのように違う刺激が欲しい、違うものが欲しい、ここまで欲しいがここからは要らんと判断しているのか。卒業後に物づくりを続けていく上で各自で何かするための材料を仕入れるために、どんどん新しいことを取り入る必要が今あるのか、そうではなくて、今の時間にしか描けない絵を集中して描きたいから演習を必要じゃないと思うのか、意見が分かれていたと思うのですが、その辺りもっと意見がないのかな聞いてみたいと思うのですが。

司会者：

はい。大学生している時にいいなあつ思っていることが、将来的に利いてくるとは限らないし、学生時に将来のこと考えてこう利いてくるだろうと思ってすることがその通り利いてくるか分かりません。では、C 先生は、あのときのあれはこういう風に今利いてるなと思うことは何かあるでしょうか？

教員 C :

えっとね、僕自身は大学デザイン科においてデザインを勉強してました。選択演習的な授業もあったのね。ですが、あまり別のことやらなかつた。すごく評判だった写真の先生の授業すら僕は受けなかつたなあ。受けてればよかつたという思いはあまりないんですよね。その後出てから、その時に“しなかつたこと”、“できなかつたこと”、“やらなかつたこと”をもう一度自分でやり出して、それからもの作りが始まってってという風に僕自身が流れたんで、7年間ぐらい僕は同級生に比べると遅い動きをして、作品をきっちり出したタイミングがだいぶ遅い。だから未だに年齢よりもヤングに見られる。あまりやりすぎない方がいいのかもしれない。授業以外であるとか大学祭とかのイベントで別のジャンルの人らと一緒に物を作ったり、全然違う専攻の先輩から物づくりを強制させられたり、いろんな物には出会っていると思うんですけど、カリキュラムっていう中ではないかなっという思い出話でした。

司会者 :

なるほど。C 先生はカリキュラム、授業の中で得たものはあまりないかな、とおっしゃったけれども、学生生活の中でやつたことは今何かしら効果があると思うんですよね。

教員 C :

あの、ありますよ、実習でデザインの勉強しているときに。でも、自分はグラフィック・ビジュアルにいましたけれど、僕らの学んでいた現場はどちらかというと放置される現場で、自分で動かなければ何も作れなかつた。自分は何をすべきかをゆっくりと、時には焦りながら考えさせていて、その物作りながら考えているときにどちらに進もうか決まりかけたのは確かです。まあ、それはカリキュラムというより、先生や先輩や同級生がいる中で自分がするべきこと、すべきことを選ぼうとしていたのかなあと。

司会者 :

ありがとうございます。では D 君、卒業してすぐでしょう。学生時代のことが新鮮に残ってると思うんですが、卒業後に実習や演習の授業の効果がこういう風に利いてるなあっていうことはないかな？

教務助手 D :

僕は短大のミクストメディアにいたときにいろんな演習を受けてきました。現代アートの作品をずっと制作しているので他の演習のが直接作品に関わったことが実はなくて、でも作品以外、ポートフォリオを作るときや、図面を引くときなど、作品以外の周りの所で利いてくるなというのはあります。学生の時に結構な数の演習をとつたんですけど、自分が使わない技術の授業は全然身につかなくて、必要だからそれを学びに行くという演習の方が身に着いていると思います。ですから、選択演習は何か明確な目的があつてとる方がいいと思っています。

司会者 :

なるほど。ところで、学生が終わったけれど続いているというのは、大学で学んだことで獲得したんですね。要は授業を通して卒業後の自分につながっていくことはあったんでしょうか。

教務助手 D :

でもそういう意味では、実習で関わった先生とは密な付き合いをしているので、先生がどういう活動をしているのかまで見て、こう活動すればこういう場所で発表できるというところまで実習の授業で教わつた気がします。演習の授業っていうのは、そこまで先生との関わりが深くなかったんで技術の獲得にとどまると思います。

司会者 :

なるほど。僕は専門学校で非常勤講師をしてたことがあるんですね。色々な教育機関があって、何が違うのかなあってよく考えるんです。大学って僕にとって魅力的な場所で、特徴ってなにかなあ、どういう魅力があるのかなあて思うんですけども…



教務助手 D :

じゃあ、僕を教えてくれた D 先生に代わりに答えてもらいます。

教員 D :

すいません、今考えながらいたんで、質問内容を全部聞いてませんでした。今考えていたことを先に言わせていただいてよろしいでしょうか？僕の東京の学生時代のことですが、大学の先生というのは作家ですから、年中作品を作っていて、学校にいないときはどこかの現場で制作している。たまに学校に来て学生の作品を見るが、基本先生は学校にいない。逆に、いるとまずいときがあって、「こっち来い」って言われて「何でしょう」と言うと、「明日暇？」って言われて「いいですよ」って言ったら、「明日から群馬県行くんで手伝って」って言われてすぐ「いいですよ、何時間ぐらいですか」、「1週間ぐらいかなあ」、それで作家の現場は見たいんで行きますと、1ヵ月ぐらい現地制作の手伝いで監禁されるんですよ。そういうものだと思って学生時代を過ごしたので、こちらに赴任したとき、先生たちが毎日出勤して出欠点呼をとって授業を開始し、時間になったら帰っていくことに物凄く違和感を感じ、そのギャップをどう埋めていこうか考えながらこの何年間過ごしてきた実感があります。もちろん学生の気質や教員の考え方も違うので、両極を見ながらどちらのスタンスで学生と付き合い、何を伝えるべきか、毎年学生の顔を見ながら考えています。一応、作家を作りたいと思って美術をやっていますので、技術の積み上げも大事ですが、学生に作品を作る現場をなるべく多く見せてあげたいと思っています。何か面白いことがいっぱいあったほうがいいなあというのが根本なんですけれどね。

司会者 :

D 先生のルーツをお聞きしたような気がしました。技能を向上せなあかんと思ってみな一生懸命絵を描き物作りするのは専門学校などでもそうなわけで、それ以外にね、学ぶことっていうのは何だろうという話に持っていくたいんですけど…。技術だけじゃない、それを分かって勉強してますよ～と思っている学生さん、N さん、何か。

学生 N :

サークル内には四大も短大も、デザインも造形もいて、互いの作品を知らないことや、多分野間の合評をしたらおもしろいなあという話に何回かなっています。制作していく中で、他人のやってるのを見て自分でモチベーションあげることが結構あるんで、他の学生の状況を知る機会をもうちょっと作ってもいいのかなって思いました。

司会者 :

そうですね。周りとコミュニケーションして、展開していくことってありますね。

学生 N :

私は授業において、講義でも演習でも実習でも同じようなスタンスで学び、そこから自分の必要な要素

を得て、制作に全て生かせるようにと考えているんですけど、授業だけでなく、友達と遊んだり先生方と雑談したり、そういうものも全部制作や学びにつながっていくと思います。簡単に言うと、能動的か受動的かの差かなって思います。

司会者：

ありがとうございます。とてもいい意見だと思いますよ。あ、どうぞ。

学生 0：

演習と実習の違いについてですが、演習は期間が半期で短いですが、実習は先生と長く関わっていけるところが違うと思います。もちろん廊下で会って「最近どう？」と聞いてくださる演習の先生もいらっしゃいますけど、実習ずっと一緒にいてくださる先生は、大げさに言うと弟子と師匠のような関係になりました、先生の生き方自体を見本にできるところが大きく違うのかなあと思いました。

司会者：

そうですね。そういう人間同士のコミュニケーション、その時間と内容はとても大きいなあと思いますね。

学生 0：

その人の作品を一瞬見た人のコメントと、ずっと道のりを知ってる人のコメントは違うやろし。これもまた演習と実習の違いかなあって思います。

#### 4. 大学での学びとは？

教員 C：

ちょっといいですか。自分の昔のことを考え合わせて思ったんですが、反発することや批判することが自分の中でとても大きな比重を占めていた気がして、大学の先生が言うことを全部は信じないし、そんな古いこと考えてるから社会おもしろくないんじゃない、などと結構意識していた。それを自分として制作にくっつけるわけですし、課題が出たとき先生が考えているだろう答えからどれだけ離れるか、合評で全然コメントできないような作品までいけるかを考えていたかな。仲良い、尊敬するだけの図式ではないものが授業の一つの意味であってもいい、と言うときたいな。

教務助手 D：

先生の言っていることが何年間も変わらないことは多々あって、先生より新しいことを考え、新しい情報を知ったとき、「してやったり」って思っています。

教員 D：

僕が知っていることは言うけれど、本当は知らんことをずっと知りたいし、新しい世代は僕らよりもっと新しいことを考えるはずでしょ、それを知りたい。

教員 E：

私も課題表を作るんですけど、その課題表を作ったときの気持ちにはある一定の範囲のようなものがあるって、そのイメージから抜け出して、クリエイティブに裏切ってくれるような作品を望んでいます。そういうのがあるととても嬉しいなと思います。

司会者：

あ、F 先生、後ろにマイクが。どういう風に学んでほしいと望んでいますか？

教員 F：

ええと、最近僕の見ている授業の学生の出席率がどんどん下がっていて、家でやっている人が増えていますが、実習時にはとりあえず学校に来てやり取りしてもらいたいと思うんです。通信教育みたいになっちゃうので。学生には話を通してなるべく考えてほしいので、学生の制作やコンセプトについて、わざわ

ざそれをひっくり返すようなことを言ってみたり、幾つかの選択肢を示して、後は学生さんに考えてもらうんです。自分で考え、根拠をもって次の判断をして次の工程に進んでもらえたらいいなあ、と思って話をするようにしてます。後で他人に突っ込まれても、ちゃんと判断した結果なので自分なりの意見を言えるという状況を目指しています。

司会者：

ありがとうございます。では、もう少しお話を聞きたいと思います。では、G先生こういう風に学んでほしいということがありましたら。



教員 G：

色々な意見が出ているので、何を話をしていいのか分かりませんけれど、今出ていたような自分で考え自分で判断した上で行動して欲しいというのは当然の話だと思うし、当たり前すぎて何を喋っていいのかと思ってしまいます。ただ、先ほどから大学の教育に関連して教員から色々コメントが出ていますが、その中でちょっと気になるのが、“研究機関”という言葉です。今の状態で、大学が本当に“研究機関”だけでいいのか。学長がよく言う“教育機関”としての機能をどういう風に果たすかもう少し考えてほしい。

先生方の作家意識だけで教育機関としての大学教育が本当に成り立つのか、成り立っているのか。その辺をもう少し学生から聞きたいんですけど。私はこの大学に来る前、高校で指導要領に則ってシラバスを作っていました。大学に来たときに授業計画表など一切なかった。ああ、大学とはなんと楽なものなのだろうと最初思いました。同時に、本当に“研究機関”、“作家”としてどれだけみなさんがやっているのか疑問に思ったことがあります。ただ作家であるだけで教育ができるか、しっかり考える必要があるようになります。現時点では文科省の指導などもあってシラバス、カリキュラムとともにしっかりとしなければいけないのですが、逆に窮屈になって高校の授業に近くなっているという感想ももちます。その辺りのバランスをどういう風にとるのか。非常に難しい状況になっています。

司会者：

ありがとうございます。そうですね、教育というものを意識的に見直す必要があるんじゃないかなと。バランスというのはどういう風にとるもんなんだろう、というお話をですね。H先生、その辺りどのようにお考えでしょうか。

教員 H：

私はクラフト出身で大学時代、物づくりの技術を徹底的に教わったんですね。わき目も振る時間がない、自由に色々やり出せたのは2年ぐらいかかるからでしょう。何年か経ってこちらのデザイン科にお世話をになったとき、学生が生活デザインをベースに盛りだくさん教えてもらっていて、本当羨ましいなと思いましたね。クラフトだけでは見えなかつたものが、こうも見えますよ、こんな風にもできますよ、とアプローチが多様で、すごく勉強させてもらいました。そこで、私が学生さんに与えられるものは何だろうと

考えました。学生には完全に技術的なことを集中してやる時間と、色々な作品展に行って様々な先生の話を聞き、そんなことが色々重なって人間の厚みとして作品を出していって欲しいと思います。

司会者：

ありがとうございます。そうですね、どう学ぶべきかとかいう話はG先生がおっしゃったように自発的に大学生たるもののは学ぶ、そういう一言に尽きると思われます。

学生P：

先生にある程度たくさん技術を学ぶんですけれども、その授業だけで終わらせるんじゃなくて、授業外でも自分の好きな制作をして技術を深めていったりすると、授業以上に技術を学べるんじゃないかなと思います。

学生Q：

私は非常に悩んだ時期がありました。今3回生なんですけど1回生の時に実習授業がデッサンばかりで、高校の時に部活ずっとやってたんでできるんです。私は一般校出身なので、1回生のとき美術的な知識がゼロに近かったんで、とにかく知識が欲しくて。大学の講義を受けていると、全然分からぬ作家の名前がばんばん出てきました。3回生になってようやく理解できるようになって、その段階で研究機関としての大学だったらしいかなあと思うんですけど、初歩から入る学生からすると、教育機関であってほしいと思います。私は1回生のころとにかく知識が欲しくて教職と学芸員と茶道、華道、書道のようにたくさん資格課程を取りましたが、それ以上に多分野の友達が欲しくて、ウロチョロしていました。現在でも多分野の友達と関わるきっかけが必要だと思います。今生徒会みたいなこともしますけれど、やっぱり交友関係を通して知識の幅が広がるのが大学のいいところではないかな、と思っています。

司会者：

ありがとうございます。ではあと一人だけ学生さんの御意見を。Rさんが見えますね、今専攻科に進んで1年目ですね。授業の形態が少し変わって三年目、独りで制作する時間が増えてますよね。何かありますか？

学生R：

私美術系の高校出身だから大学に入ってきたときにそれなりの知識は入っていたんですね。短大に入つて思ったことは、午前の講義も午後の実技も結構美術のさわりを教えているのだなあということでした。だから、自分から進んで勉強しなくてはいけないとずつと思っていました。だから、専攻科に入つても別に違和感はありません。

## まとめ

司会者：

なるほど。ありがとうございます。毎度のことなんですけれども“ジャーン”って結論を出す会議ではないんですね。こうやって色々考えてほしい会ですから、こんな感じで時間切れとともに今日もそろそろ終わります。では、色々な意見が出たところでマイクをA先生にお戻ししたいと思います。

総合司会者：

誘導をあえてしなかったのでこういう結果になりました…。学生さんには素直に答えてもらったと思うんですけども、やはり学生さんにとって実技というのは技能を学ぶべき場であるという思いがかなり強く、反面、それ以外の目的に関してあまり意識をしていないという印象を持ちました。授業アンケートを後期から変えましたね。そのとき、実技が技能だけではないという考えに意識が向いてくれるといいのなあと密かに思っていたんですけども、まだまだ浸透するには時間がかかるのかなあ。美大だからある程度

予想される所ではあるのですが、大学生としての自覚というものが美大の専門性の後ろに隠れて、美大の学生である前に一人の大学生なのだという意識がどこまであるのか計りかねるところがございました。どうでしょうね、発言していただいているので I 先生にも無茶ぶりをしてよろしいでしょうか。

教員 I :

僕は今日聞きに来たんですけれどもね。みなさんにとって見えてる部分はどうしても身近なところですよね。実習室の様子や学生や先生への身近な視野など。僕は大学という場はね、家にいるのとは違うし、会社にいるのでもない、独自の空間だと思うんです。そして今ひとつ非常に残念なのが、大学の独自性に対してある意味言葉の問題かもしれません、特権的に思ってもいいと思うんですよね。我々はもっと自由に考えることができると思うんです。もっと思い切って社会が変だということに対して自分がアクションをとれると思うんですね。例えば、今の日本がおかしいということについて作品を通して自分のメッセージを強く出すことができる。そういう力を芸大生は持っているはずだと僕は強く思うんですが、その辺の自覚が弱いな、とそれは僕は非常に残念なんですね。

総合司会者：

大学というのは社会から自由である、独立している。そういう所は大学の自治とも関係していると思いますが。あ、ご発言ですか。

教員 G :

ちょっと今 I 先生の発言を聞いてひとつ思いだしたんですけども、みなさんモラトリアムっていう言葉を知っていますか？大学の先生だったら知っていると思いますけれども、あなたたち知っていますか？社会に出る猶予期間です。その間に何をするかっていうのが極めて大事なんです。社会人でもないし、高校までの生徒でもない。今言われたような社会に対する批判精神とか、色々なもので人生を作っていく一番大事な猶予期間なんです。社会人になる前の人間形成。この大学に所属しながらどう生きるのか、大学に何を求めていくのか、そういうことが今ここで多分議論しようとしている最も根底の部分だと思います。これきっかけにその辺の所をしっかりと考えてほしいという感じが残ります。

総合司会者：

ありがとうございました。では、今日はそろそろおしまいにします。次回はこのお話を受けて「大学生とはどうあるべきものなのか？」をテーマにしましょう。今日の感じでは、みなさん深く考えていないような気がします。大学生っていうのはどういう特権的な立場の上に立っているのか、では我々はその学生になり得ているのか、その辺のことをシビアに仲良く議論できればと思っております。次回は 1 月の 16 日ですね。みなさんにはお早めにお伝えしましたので、どうぞいらっしゃってください。では終了です、ありがとうございました。なお、帰りがけにアンケートがありますのでできればそれを書いて私どもにお渡しいただければと思います。

## 第5回「大学生って、なんだ？」



2011年12月16日 17:30～19:30

京都嵯峨芸術大学 第6演習室

主催：FD委員会、学友会執行部（共催）

## FD Cafe 第5回 「大学生って、なんだ？」

### ごあいさつ

総合司会者：

こんにちは。では、第5回目、今年度最後のFDカフェを始めます。いつものように注意ポイントを申し上げておきますね。まず、悪いところ、欠点ばかりを指摘しないこと。前向きな意見を待ち望んでおります。それから、学生と教員の相互理解を目指し、一方通行にならないようにね。それから自分の話ばかりしないようにしていただきたいと思います。

第1回は「授業面白いですか？」っていう話でした。第2回は「合評おもしろいですか?」、第3回が「講義科目」、第4回が「実習・演習」についてお話ししましたね。今日が最後で「大学生とはどういうものか」についてお話ししていただきたいと思います。



まずグループディスカッションをします。30分ぐらい。その後、グループごとにプレゼンテーションします。その後みなで集まって全体でお話をします。グループディスカッションにあたって、「大学生ってなんだ」っていうのはかなり抽象的ですから、いくつかヒントを言いますね。まず、「高校生と大学生って何が違うか」。それから、「学生と生徒の違い」。それから、高校時代のクラブ活動と大学時代のサークルとかのクラブ活動の何が違うのか。この辺から考えていただき、学生生活の中の不足感みたいなものが具体的に出てそれを解消するアイディアが見つかれば、少しは理想的な大学生活のイメージに近づけるのかなと期待します。

では、グループを分けます。

## グループディスカッション



### 第1班

- ・大学生としての自主性、自己責任、目的意識
- ・大学が研究機関であること
- ・受動的な学びよりも能動的な学びを
- ・大学4年間は自由な特権的時間
- ・やる気が出てくるキッカケは、カリキュラムよりも教員や学生同士の刺激

### 第2班

- ・自主性、能動的な学び
- ・意識の低い学生が多い、自立しないと
- ・学びの自由とは？
- ・学生にとって大学とはどのような場か？

---

## 全体討論



### 1. 大学とはどのような場か？

司会者：

では、これから全体的な討論に入っていこうと思います。両グループとも全体討議がいらないような立派な結論に達している気がします。前回、第4回 FD カフェの最後で某先生から、「大学というのは極めて特権的な時間・場所であり、この大学の2年間あるいは4年間は限られたモラトリアムの時間であって、

例えば世間のしがらみから自由であり、批判精神を發揮して、何か挑戦することのできる限られた時間であることを考えていただきたい。」という発言がありました。

それを受けた今回のFDカフェになるわけですね。特権的な時間を享受している私たちが同じ場所、同じ時間にいるわけで、教職員・学生という違いを超えてみなが大学人として一緒に学んでいることを念頭に置きながら、今日は最後ですし学生と教職員との区別を全くなしにして、ここで自由に討議してみたらどうかなあと思います。学生はこうあるべきという考え方をどなたかに発言をしていただきましょうか。ある程度進んだところで、少しずつ抽象部をアップしてみましょう。出来るかな？

教員 A :

今、論点はどこに設定されているんですか？

司会者 :

グループ討議で出てきた論点が短くポイントに分けて板書されていますね。グループ間でだいぶ共通しております。“自主性”、自主的に考えて行動するというものが学生である、というようなイメージですね。それから、“自己責任”、自分でやったことは自分で責任をもつ、子どもではないのだ、というような意見も出ていますけれども、これはどうでしょうかね？後で考えて見ましょうね。それから、“目的意識”も大学生としての大変な資質であると。“自主”、“自立”、“自由”という言葉が両グループから出ております。それから社会のことを意識している面も共通していますね。では、最初にこうしましょうか。

「大学っていうのはどういう場なのか」というトピックが第2班で出てきました。学生さんというのはどうあるべきなのか、というのは恐らく大学がどういう場であるかという認識と連動していると思います。我々は今大学にいますが、それはどういう場だと思って学んでいるのか、あるいは教えているのか。それぞれの感想、思いなどで構いませんのでそこから掘り下げてみることにしましょうか。

---

学生 A :

僕が思うにですね、大学っていうのはある種の研究機関であると思うんです。広い意味で捉えた研究ってことですけれど、自主性って言葉で言い表せるか分かりませんが、自分が大学で何をしたくて何をするべきか探し求めて実際に研究する、というのが大学生のあり方なのかな、まとまってないんですけど、そんな感じがします。

司会者 :

教育の場であり研究の場であるというのは大学の特色であり、自分の学問、自分の学ぶべきことをとことん突き詰める場所であると、そのような認識が出ました。他に、それを補って別の面もあるよ、ぼく、わたしにとっての大学は研究の場であるこの他の面もあるよって人がいましたら手を挙げてみましょうか。

学生 B :

これは芸大に関してなのかもしれないですが、刺激がいっぱい転がっているところだなあって思います。同じ学年の子、先輩、色々なことをしている人がたくさんいて自分の考えの到底及ばないことをしていたり、何してんねんコイツっていうような人がいて刺激になったりとか。

司会者 :

その刺激をどういう風に生かそうと思いますか？結果として自分にどういう影響があるのか。

学生 B :

多分絵は描こうと思えば自分の家で独りでできると思うんですけど、人を見ることで視野が広がると思

うんですよ。だから吸収してちょっとマネをしてみたり、自分が今まで興味なかった分野に目を向けてみる機会になると思います。

司会者：

視野を広げるというのを黒板に書いておいて下さい。

学生 C：

まあ究極論なんんですけど、私は大学にはあまり期待していないくて、もちろんお世話になっている人もたくさんいるんですけど、自分の人生において大学っていうのは一応所属しておいて、その中で自分がこれをやりたいって思った目標をこなしていく場所と考えています。私は教員になりたいんですが、高卒ではなれないし免許が必要で、美術の先生だと芸術大学卒とかでないと。だからここにいると思っています。教育大の美術学科にも行けますが、それは個人の選択ですよね。自分にとっての大学は、視野を広げるポジティブな面もありますが、所属だけして私は他の方向に動いてるっていうネガティブな面もあると思います。

司会者：

ありがとうございます。私も大学院の院生の時には、学費で学生の身分を買っているのさ、と拗ねた発言をしていた時代がありましたが大体は同じ発想ですね。でも、Cさんには中学・高校の美術の教師の免許をとるという明確な目標もありますので、その中で大学の自由な時間を自由に使いたい、自由に使うことにおいて大学に過度の期待はないというような意見でしたね。要は自分が自由にいる場を確保した、ということですね。

学生 D：

個人的な大学のイメージなんですけど、開かれた場所というか、小学校から大学へと扇状のようなイメージがあって、今はその一番開いているとても広いスペースについてふわふわしているイメージがあります。今後どうすればいいか、個人的には社会に向けて大学に通っている意識が強くて、学生として自己選択のためにここにいるのかなあと強く思っています。



司会者：

就職が厳しい今の状況によって大学の卒業と同時に古代の世界観のように滝のように水が流れていて、流れた後の世界は分からぬ。そのような心境が背景にあるのかもしれません。その中で必死に何か目標を探しながらこの大学生活を送っているというような感じでとっていいでしょうかね。

他にはありますか？大学生としてこういうところがないと本当の大学生とは言えない点はないかな。例えば、学生同士の結び付きがちょっと足らないのではないか、というような意見について誰か、Eさん。

学生 E：

私は大学が結構出会いの場と思っていて、さつきBさんが言ってたように他人の考えに触れることで吸

収することができるし、素敵な先生方もおられるし、そういう出会いの場所かなっていう思いがあります。

私さつき、竹造（竹で行灯などを創り地域連携している学生クラブ）の竹割りとかを手伝いに行っていましたんですけど、そういうのも偶然の出会いから手伝うようになって一緒に楽しくやってたり、表現を求めてとかでなく単純に人ととの結びつきを与えてくれる場だと私は最近強く思って、この大学生活を日々過ごしています。

司会者：

人と人との結びつきによって何か生まれたとすればどんなことでしょうかねえ？

学生 E：

自分ではたどり着けない発想だったり答えだとか、自分が逆に相手の人にその発想なかったわあと言わることもあるし…。

司会者：

豊かな大学生活のためにはクラスメイトの存在が必要であると、それは漠然とみなが思っているところだと思います。他に大学生活の意義ってものはどこか見出せるものがありますか？

では、今出てきた意見それを総合すると“理想的な大学”とは言えるんでしょうか？先生方も遠慮なく発言していただいて結構です。

## 2. 視野を広げるとはどういうことか？

司会者：

では、“視野を広げる”っていうのはどういうことなんでしょうね。人間的に豊かになるには視野が広がってほしい。でもその視野が広がるってどういうことなのか、あるいはどういう手段によって視野が広がると思っているのか…。

学生 B：

自分のことを例にしたいと思うんですけど、私は個人的に高校生の頃からクロッキーを続けていて、今は大学でクロッキーの会を主催して、いっぱい描いています。続けることで何を得たか、何かひらめいたか、まだつかみきっていないんですけど、これからも続けていきたいと思っています。

1回生の時にいろんな先生を見てもらったんですよ。自分は油画なので、もちろん油画の先生にも見てもらって、油画の三人の先生や非常勤の先生もたくさんいて、違う学科で日本画の先生を見てもらったりして、そしたら分野によって言うことが全然違うんですよ。いろんな意見とか考え方があって、何か選択肢の幅が広がったっていうか、何か考えるきっかけがいっぱい生まれる感じがして、それがとても良いことだなあと思っています。さつき、第1班で「後輩に伝えていきたいことはなに？」という話になったんですけど、私の場合は、もし何か描きたてるものがあるんだしたら、もっといろんな人に見てもらって、いろんな意見を聞くと良いと言いたいです。

司会者：

ありがとうございます。今の意見だと多様な物の見方を学ぶっていうことですね。それが視野を広げることになると。納得できるところが大きいにあると思いますが、別の考え方をしてる人もいるかな。では、おねがいします。

学生 F：

私の場合、視野を広げるって意味の中に、人の違いを自分の中に構築していく、築いていくことが含まれていて、その点で大学の交流の場というのが私の中で重要だったと思っています。独りで考えるのではなく、周りとコミュニケーションしていく中で、もっと自分っていうものを出していこうって思うようになる気がします。突発的に思い切って独りで旅行に行ってみようとか、人と比べるのでなくて、自分

分を見つめ直すっていうか、視野を広げるとそのうち自分を見つめるようになってくる、そういう機会じゃないかなあと思うようになりました。

司会者：

今、構築するって言葉がありましたけれど、そうするとFさんのイメージでは割と自分自身の考え方が垂直方向に積み上げていくことが、視野を伸ばすっていうことなのかなという印象を受けました。他の意見はありますか？

学生G：

僕は以前は自殺秒読みの生活だったんですけど、学友会執行部に入ってそこから色々な人に会って、会ったことのない芸人さんとか、普通に生活してて会いそうにない先生にも会って、こういう考え方もあるんだとか、他人の個性を認める、ですかね。自分から動いていたら発見の驚きがあって、今も学友会の活動を続けているんですけど、色々な人に触れ合って新しい発見が見つかってすごいなって僕は思っています。

司会者：

ありがとうございます。発見と驚き、それが視野を広げる。私が意外だったのは、普通視野の広がりを考える時には、いろんな別の教科を幅広く受けて、それで知識量を幅広く得る水平的な視野の広がりというものを普通の人は考える、と思っていたんです。

ここで教職員、学生全員で挙手してみましょうか。視野の広がりっていうのは水平的に広がっていくというイメージを持っている、そういう人は今挙手。そうではなくて、垂直に積み上げていくことで視野が広がると思っている人。（両方にはほぼ同数の挙手）知識によって学ぶこと、知識を学ぶこと、それによって視野が広がるっていうことを私は完全には否定しません。技能を学ぶことによって視野が広がるっていうのも完全には否定しません。しかし、それは大学生の本来のあり方なのか。それとも、きちんと人間性を積み上げていくというプロセスにこそ、広げるということではなくて積み上げていくというプロセスをイメージしたほうが大学生としてのイメージに即しているか。つまり垂直か、それとも水平なのか。分かりませんか？ちょっと抽象的すぎますか？

教員A：

結局その基軸になるところがどこになっていくか、例えば僕の視野を広げるイメージは、自分で解説すべき問題点があって、今までの経験や知識ではなかなか解決できない、長く苦しんだ後に、こういう風に考えたらこういう風に解けると気づく、その時に僕は視野が広がったって実感を持つんですね。だから、あんなこともこんなこともっていう広げ方も僕はそれはそれでいいと思うんですけど、何か自分のリアルに思えること、自分のリアルの実感に基づいた制作の現場で、これまでの自分の解答方では解答できなかったことを超えるために、別の視点を持ち込むことによってクリアしていく。そういうところが大学の意味かなってことを考えます。



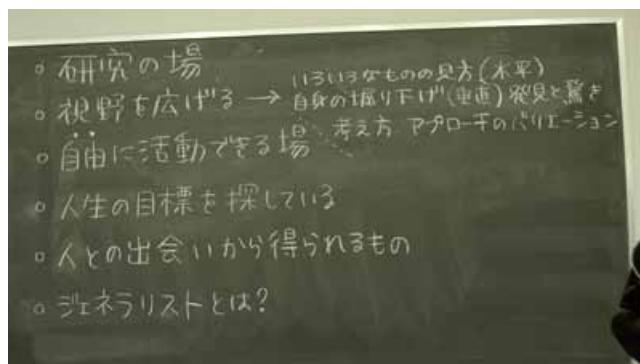
司会者：

水平であるということは大事なことだけれども、平板な情報の広がりだけで大学の学びが成り立つわけではないし、何か繰り返し発見しながら視野が広がったな、という瞬間を繰り返していく、ということになるのかなと思います。

### 3. ジェネラリストの曖昧さ

司会者：

実はこの間、学生さんが参加できなかったんですが、学内の教職員討論会がありまして、そこでいわゆるジェネラリストの育成について言葉の定義がどうも不十分だった気がして、学生さんにもその意見を聞いてみようかな、と思ったのです。ジェネラリストっていうのはいろんな定義の仕方があると思うので私も難しいなあ。ジェネラリストっていうのは色んな分野に通用して何でも屋のようなもの、と仮に定義してみましょうか？



教員 A：

ジェネラリストをポジティブに語るとしたら、その反意語がスペシャリストで、ある特定の狭い領域での専門性に長けた人がスペシャリストで、ジェネラリストはその狭い中で色々なことをちゃんとふまえてて、ただ単に知ってるだけでなくもっと総合的な物事を考えることができるっていう人をジェネラリストとしてポジティブに定義してる。その定義の仕方も人によってバラバラなので、この教員の間ではもっと定義を深めていこう、お互い確認して行こうっていう話には前回なりました。

司会者：

これは我々教員の中ではなかなか定義されませんが、学生が話し合いに参加すると見えてくるところがあるのかもしれませんね。何でも屋、ひとつの専門分野に集中しないでまんべんなく何かに長けていると。そういうような人間像というのはみなさん目指すところですか？

学生 C：

今 A 先生から伺ったジェネラリストの定義から言うと、関西の大学にはあまり普及していないかもしれないんですけど、東京の大学にリベラルアーツ学部っていう学科、学部がありますね。それって要是ジェネラリストを育てたいという理念のような気がします。何か、視野広い人養成のような、専門があまりなくて決まったらそっちに行ったりいいみたいな雰囲気なんですけど、まだ発展途上なのでまだ結果が出ていない状況なのかと思います。でも、芸大って括られた場合には、ジェネラリストを目指してるという社会的な目もなく、私たちにもそういう意識がないんじゃないかなって思いました。

教員 A：

芸術の中でジェネラリストって言っても仕方がない、もっと色々な部分を知ってのジェネラリストで

しょって感じですよね。

司会者：

今、リベラルアーツっていうのが出てきてしまいました。いま学生さんにこの場で話すにはあまりにも難しそうると思うんです。ただそのリベラルアーツの定義は“何でも屋”ではありません。それだけははつきりと言えることです。

何でも平板に広く何かを知っているということだけでは駄目なのではないかという意見はあるかな？

学生H：

私としてはまんべんなく知識を得るというのは大事なことではあると思うんですけど、ただまんべんなく手を広げ過ぎてしまって自身の收拾がつかなくなる人の方が多い気がします。視野を広げるにしても、私の中で水平垂直にこだわる必要はないと思いますが、広げすぎてしまっても今度は最後まで全部ピントを合わせることはできるのかなっていうのが疑問で、芸術ってその時点で括られたものではあると思うから、こういうところで学びを得るんだったら専門の方がいいのではないかなあと思います。

司会者：

ありがとうございます。それはそうかもしれません。うちは芸術大学、芸術短大であって、これはみんな専攻を持っていますから広く浅く学ぶというようなところではない。ちゃんとした実技、専門実技というものを学ぶという目的ははつきりしていますね。ただし、それを突き詰め過ぎるとやっぱり大学ではなくなるような気がします。ただただ専門的なことを学ぶというのであれば、これは専門学校に行くので十分なはずで、そちらのほうが専門に時間を確保して学ぶことができるカリキュラムがありますよね。我々は大学生、教職員ですから、専門だけ突き詰めるという発想には限界がある。

学生I：

最初から視野を広く持って学べるわけではないと思います。まずは、専門の技術を地道に積み重ねるという下積みがなければいけない。急激に何もかもできるわけではないし、それに手を出してしまっても得るもののは薄いのかなと思う。順序が大切だと思います。

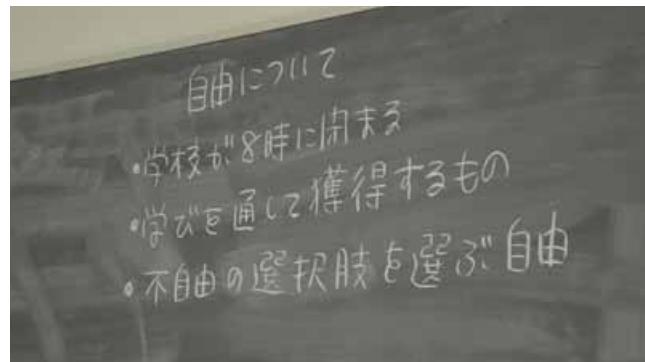
司会者：

ただやみくもに視野を広げるっていうのが専門の範囲を超えて、無視して多分野にまたがるのではないだろうということですね。1991年以前の大学は人文科学、社会科学、自然科学、語学、保健科学からそれぞれ何単位と、まんべんなく科目を履修するというシステムがありました。これをもってリベラルアーツと当時は呼んでいたのです。ただそれは本来のリベラルアーツではない。これは日本の戦後の大学教員が堕落してそういう風に誤解してしまった結果なのですね。それに対してみなさんがどう思うのか多少確かめてみたかったです。

#### 4. 大学における自由とは？

司会者：

では、ちょっと話題を変えましょうか。今度はこの両方の黒板に書かれている“自由”、モラトリアムとも関係しています。我々にとっては猶予されている時間であると。この大学教育における自由、大学という場においての自由というのをみなさんどういう風に考えているのか、大学生活の中でどんな“自由”を楽しんでいますか？



学生 J :

とっても自由だなって思って生活していないです。

司会者 :

ではその不自由っていうのは?

学生 J :

学校が8時に閉まる。

司会者 :

そうですね、それは不自由ですね。ずっといたいですね。

学生 K :

教育っていう一定水準があった上に成り立つものだと思うんです。自分の殻を破ってなんぼ、その殻から出ていくことが自由だと言う人がいるんですけど、僕はまず殻とか枠とかから出る以前に、まずは枠にはまる必要があると思います。大学ではある一定の基本的な技術っていうのを身につけて完全に消化する、各分野の中での授業の基礎的な内容っていうのを基礎的な勉強としてある一定程度吸収する。それから自分が何か表現できるか考えたときに、一定の自由っていうのが出てくると思います。

司会者 :

ある程度の学び、その成果に伴って初めて自由ってものが出てくると、その自由が表現の自由であったりというようなことですね。それまでは不自由であったわけだ。

学生 K :

不自由というわけではないですけれど、それは充実してる基礎の学びだと…

司会者 :

自由というのは、技能などの修得を通して獲得されるもの、という発想ですかね。はい、ありがとうございます。

B 先生 :

前半いなかつたのですが、ちょっと違う考え方で“自由”という言葉を説明できるかなと思ってマイクを取らせてもらいました。例えば、人は生きる上で完全な自由って獲得できないのではないかという視点に立つとしましょう。そして、大学の四年間というのを、この先のどこでどのような不自由を自分で背負うかを決める自由がある時間と考えられないとthoughtいました。例えば、自分の今後の人生を選ぶとなると必然的に何らかの不自由が予想されると思うんですけど、その時に、この不自由さを私は背負うので、その分他の不自由からは少し自由であろうと自分で選ぶ“自由”を持っている。どの不自由を選ぶかの自由があるんではないかなと。

教員 C :

今の話すごい面白いですよね。この間、なでしこ JAPAN の監督が、「サッカーの試合中に選手たちに自

由な発想でプレーしてもらう、だからあえて指示を出さない、彼女たちがどこに走るか、どう動くか自分たちで発想して自由に行動して、それが結果として出ている。」

そういう話をしていたんだけれど、その前にまず彼女たちには山のような修業があって、どういう選択肢があるのかを全部分かった上で自由がある。どういう不自由があってどういう自由があるのかを知ってはじめて、“自由”は成立するのではないか。だから、何も知らない人に何の自由もないんじゃないかな、という気がします。積み重ねることによってできることもあるし、横の視野も得ることで自分がどこに走つていいのか、知識ではなく経験で分かってくる。だから経験がどれだけあるかが大事です。



教員 D :

僕は意見というより、疑問質問なんですけれども、我々年配の教員が大学生活を送っていたころ、大学を卒業すればほぼ間違いなく就職という社会の受け皿があった。そういう状況で大学生活を送っていた僕ら大学生の自由と、君たちの今の状況での自由がどの程度違うのかな、どういう風に考えるのかなあと。

学生 L :

今は大学が個性というか、その人らしさを教えなければならない状況になっていますよね。

司会者 :

そうですね。それでかえって受け身になっているというか…。我々の学生時代には、試験の時にだけ現れて優や良を取っていました。単位なんかどうでもいい、簡単に取れると。大学院の時には先生も学生もタバコをスパスパ吸って、始業の30分後に始まり終業の30分前に終わるような授業もありましたし、それが成り立っていたんですね。学生もそれで満足していました。今や、出席はしなきやいけないし、単位認定も厳しい。昔と比べると今の学生さんの学生生活ぶりというのは大幅に違うと思います。けれども、その中で大学として本質的に変わっていない部分があるんではないかと思っておりまして、それが今提示した“自由”という問題に関わっていきます。今までの議論ではまだ輪郭を描くまでに至っていません。でも、これは今の学生さんの問題だし我々が頭からこうだっていう風に言ったところで、たぶん心には響かないと思います。ところで、E先生は何を言おうとなさってたんですか？

教員 E :

B先生の方から“自由”を選ぶ代わりに代償として不自由もふまえなければならないというお話がありました。それに関して、僕が学生だったとき恩師から聞いた話です。僕の先生が70代末から80年代初期に大学生だったころ、コンセプチャルアートとかインスタレーションとか、今の現代アートのスタイルがだんだん確立していく時代だったわけですね。オブジェクト、彫刻を作ることではなくて、インスタレーションが自分たちが今からやっていく中心になると。学生時代、1回生の時は大部屋で何十人もいるのですが、3回生以降はおよそ4人で1部屋が与えられます。個室ではありませんが、自分の制作道具、作品が部屋中にひしめくアトリエらしいアトリエがようやく与えられて、私物などを集めて“熱い”部屋を作っ

ていくんです。だけど、恩師がやっていたことはインスタレーションである。彫刻絵画であればどこかに展示できるが、インスタレーションの場合、ホワイトキューブ的なプレーンな空間がなければそもそも実験も展示もできない。どうしたら実験ができるか話し合い決定したのは、自分たちが与えられた部屋から私物を撤去して何もないプレーンなインスタレーションのための空間として開放し、自分たちはそこから退去するということでした。僕の学生当時もその部屋はきちんと演習室と名付けられ、プレーンな展示空間としてありましたし、現代でも残されているはずです。ということで、そういう結果を残したことに関して、僕は恩師を尊敬しています。

## 5. まとめ

司会者：

ありがとうございました。ただし、時間が迫ってきました。私としてはもうちょっとこう想定していた議論の路線があったんですけどね。

教員 A：

“自由”っていう言葉の定義、方向性をもうちょっと決めていったらどうですか？今、自由っていうんな定義があって、議論が交錯している感じがします。

司会者：

かなり交錯している感じがします。ただ、もう残り時間少ないので、来年度またF D カフェをやりますので、その時に少し詰めていくという風にしていきましょうか。年度の結末としてはちょっと不十分な気もしますが、結論に近いところまで強引に持っていくのではなく、まずはいろんな自由の考え方があることを確認して今後の議論を楽しみにしていきましょう。

結論として一応まとめます。まとめるというのは非常に難しいのですが、ただ恐らくはこういうことではないですかねえ…。

自主性が重んじられる。それから、自分で自分の行き先をきちんと判断して自ら決断する、そのような意気込みとか能力、そして、たゆまぬ努力、それらが大学生としては理想的な資質であるというところですかね。例えば、羅針盤があつて、その羅針盤を常に磨いている状態、いろんな人と出会ったり、本を読んだり、専門分野の教育内容を通した気づき、専門以外のところでの気づきを通して磨いていくこと。しかも、その羅針盤というものが小さな方位磁石ではなくて、狭い森を探索するだけの道具ではなくて、B先生のお話にもあったように滝が流れ落ちていく先、その荒波に対して乗り出していく、そういう大きな精巧な羅針盤をこの大学の中で各自が作っていく。そのようなイメージを教職員と学生さん、みなで持っていたのではないかと思います。そのような結論でよろしいかな？もしよろしければ拍手をいただければと存じます。

(拍手)

何か最後に伝えたいことは後の二次会がございますので、その時に議論していただくと言うことで。では、総合司会にマイクをお返ししようと思います。

総合司会者：

ありがとうございます。来年もあるんだあ、と思ってぐったりしているんですけど、それでは多分駄目なんですね。大学に勤めると色々仕事がございまして、ぐったりしているんですけど、よしやろうと思って、やるぞ、やったろうと思うと面白いところが見えてきて、熱中してやっている時間があつたりしてい

ます。それを繰り返しているんです。だから、やっぱりやろう、何かおもしろいことを見つけたろうと思つてやらないと駄目だなあと。面白いものが面白いのは当たり前だと思うんです。

はい、というわけで8時に施錠されてしまいますから、早く行かなければいけません。みなさんカバンはお持ちでしょうか？

## 2-6. FD カフェ・アンケートの分析

### ①FD カフェの参加者数と参加した学生層について

卷末にまとめた資料には、FD カフェ各回のアンケートが集計されている。ただし、アンケート回答者数は必ずしも参加者数と一致していない。途中から参加する教職員・学生、アンケートに回答せずに退出する教員・学生も多くいた。FD 委員会としては正確な参加者数を各回でカウントしておらず、これは大きな不備であった。参考までに、本年報の読者には、アンケート回答者数の 1.5 倍程度がおよその参加者数と考えていただければ幸いである。

任意参加のイベント開催であり、夕刻の遅い時間帯に設定しただけに、多くの参加者を見込むことができるか当初不安であったが、蓋を開けて、まずまずの実績を重ねることができたように思われる。特に、第1回目の FD カフェでは学生が 40 名強集まり、教職員参加も 20 名程度になるなど、学内的一大行事として盛況の観を呈した。その後、回を重ねるにつれて参加者数が漸減していくのであるが、ディスカッションの盛り上がりに関していえば、人数規模として適正さを欠くことがなかったように思う。むしろ、限られた人数でのディスカッションにおいて議論が熱を帯びる場面もあり、アンケートでもそのことを読み取ることができる。

参加者が漸減した理由についてはまず、各回の開催告知の遅れが指摘できるだろう。教員に対してメール告知が 2、3 日前に行われる、ポスター掲示が前日、前々日になる、チラシが効果的に学生に行き渡らないなど、学内において十分な告知がなされなかつた。また、大学 HP 上で、カフェ中のディスカッションを文章に起こして、ブログ形式で掲載することを計画していたが、その作業が大幅に遅れたことも学内広報において痛手となつたと推測される。さらには、教員間での温度差が大きく、FD カフェの意義について理解が十分行き届いていなかつたことも指摘できよう（教授会等における報告に工夫が必要かもしれない）。平成 24 年度に向けて解決すべき課題である。

なお、FD カフェに参加する学生のほとんどは、平均的な学生一般よりも就学意識の高い学生であったと思われる。アンケートでも、無気力・無関心なその他大勢の学生の存在をどうするのかを問う記述が散見される。これらの層の学生に対しては、大学 HP のブログ記事を通してじわじわと意識浸透を試みる計画であったのだが、参加者数の漸減が示すように、年度内において期待通りの浸透が行き渡らなかつたものと思われる。ブログ掲載の遅れもあって効果が薄まつた可能性もある。今後、長いスパンで学生や教職員の経年的な意識変化を検証する必要があるものと FD 委員会では考えている。

### ②FD カフェの進行について

毎回の FD カフェの進行については、学友会執行部の協力を得ながら、主に FD 委員が担当した。特に、各回後半の全体ディスカッションでは参加者を前にして、各回ごとに FD 委員が持ち回りで司会役を受け持つことになった。委員のうち 1 名（佐藤）を除き他 4 名（神谷、山本、仲、倉山）が実技系教員であり、普段の授業において一对多のディスカッションを多く経験しているわけではない。こうした構成の中で、各回の司会役はアンケートの評価は別として大いに気力を振り絞ったものとの印象を持っている。

FD 委員はそれぞれ、割り振られた役割を忌避せずに担当した。全員で同じ程度の分量の業務を分担することで委員会内での一体感が増したように感じられる。それぞれの委員の持ち味が活かされる場面もあり、連続して参加する学生にも新鮮に映つたと思っている。ただし、アンケートにも表れているように、明確な結論に至らないモヤモヤ感を参加者に残したことは事実である。また、教員に発言を振りすぎる場合があつたり、会場の学生の発言機会を自由に与えられなかつたり、議論の内容を発展させるスキルの問題等で悪戦苦闘したことも認めざるを得ない。平成 24 年度まで順調に FD カフェ活動を継続していくためには、現状維持ではなく FD 委員間でさらなるスキル・アップを図つていかねばならないものと思われる。

ボトムアップで学内意識形成を図る、学生も巻き込んでの活動展開を志すためには、ディスカッションを進行するスキル、大学教育全体を俯瞰的に見るための大学人としてのリテラシーが必要である。FD カフェはこの意味で、委員にとってよき道場となったように思われる。FD 活動を担う人材育成が必要であることは、文部科学省が認めているところでもあるが、要は大学人として高い見地から学内の意識共有を進めることができる人材をいかに学内で養成するかということではないだろうか。しかも、我々の年間の経験から推測するに、その人材は教員組織ばかりでなく、職員間でも学生間でも養成が志されなければならないと思われる所以である。